

地方創生に関する特別委員会 視察概要

1 視察期間

平成28年11月17日（木）から18日（金）までの2日間

2 視察先及び視察事項

(1) 徳島県 商工労働観光部にぎわいづくり課

・徳島市内で開催されているアニメイベント「マチ★アソビ」の取り組みについて

(2) 徳島県神山町 特定非営利活動法人グリーンバレー

・地方創生推進に係る取り組みについて

3 視察の目的

(1) 徳島県 商工労働観光部にぎわいづくり課

現在所沢市は、株式会社KADOKAWAとの共同事業として「COOL JAPAN FOREST構想」を推進するため、KADOKAWAが建設する拠点施設を中心とした半径500m圏内について、「みどり・文化・産業が調和した地域づくり」を進めるための施設整備、地域ブランド向上に取組み、周辺環境整備や交通アクセスの構築を2020年までに行うものとしている。

徳島県では平成21年より徳島市において「マチ★アソビ」というアニメイベントを開催しており、本構想が国のクールジャパン推進施策におけるモデルケースとなっていること、地方創生施策における県との関わりを考える面で参考事例となることなどから、現地において担当者より説明をいただき、今後施設を中心として展開する地方創生の取り組みに関する認識を共有し、委員会審査の参考とするため、視察を行うものである。

(2) 徳島県神山町 特定非営利活動法人グリーンバレー

当市では、株式会社KADOKAWAの共同プロジェクトとして進められている「COOL JAPAN FOREST構想」を策定し、文化と自然が共生した地域づくりを進める構想を掲げ、民間企業が建設する施設を活用しながら産官共同による産業振興や地域の魅力創出を目指している。

特定非営利活動法人グリーンバレーにおいては、ICT関連企業等の「サテライトオフィス」の誘致などが全国的にも注目されており、また、行政とともに移住者と地元町民との交流活動を行っている。その取り組みは地方創生の視点からも注目されており、その活動内容について視察し、当委員会における今後の審査の参考としたい。

4 視察の概要

(1) 徳島県 商工労働観光部にぎわいづくり課

・徳島市内で開催されているアニメイベント「マチ★アソビ」の取り組みについて

出席者：徳島県商工労働観光部にぎわいづくり課

玉田直彦課長、日野貴美子課長補佐、三木康裕主任

平成28年11月17日（木）午後1時30分より、東端徳島県議会事務局長からの歓迎の挨拶、中村委員長の挨拶の後、三木主任よりパワーポイントによる概要説明、質疑応答があり、松本副委員長の挨拶をもって午後2時50分に視察を終了した。

【概要説明】

「マチ★アソビ」については、平成21年の秋から、春秋年2回開催をしてきて、この10月で17回の開催を数えてきたところです。回を重ねるにつれて、参加される方も増えてきて、これまでに80万人余りの参加がありました。

・徳島とアニメの出会い

本県出身の近藤 光氏が代表取締役を務めるアニメ制作会社、ユーフォーテーブル株式会社との関わりがあります。当時、ユーフォーテーブル社長であった近藤氏はスタッフに自然豊かな環境で仕事をしてほしいと考えており、その思いが県の補助制度の拡張とマッチングし、制作スタジオを徳島市の国際東船場ビル内にオープンしました。そこでアニメイベントの掘り起こしを行い、平成21年にはアニメと実写が融合した阿波踊りのポスターを制作し、徳島市観光協会とコラボレーションして眉山山頂での秋フェスタを行いました。これが第1回「マチ★アソビ」の開催になります。現在は近藤氏が立ち上げ代表を務めているNPO法人マチ☆アソビが中心となりイベントを開催しています。

・「マチ★アソビ」というネーミング

我々徳島県民は徳島駅から旧市街地の東町の方に出掛けることを町に遊びに行くといい、それが由来となっています。

・「マチ★アソビ」の開催

春と秋の2回、開催しており、この秋に開催した「マチ★アソビ」vol. 17では17日間開催し、メインイベントの期間3日間では約8万2,000人の来場がありました。「マチ★アソビ」のコンセプトは徳島を遊び尽くす、マチをアソビつくすということで、徳島のシンボルである眉山や市内中心を流れる新町川周辺を中心に町全体を会場とした周遊型のイベントとして実施しています。

参加者は年々増加の傾向にあります。映画「君の名は。」の監督、新海誠氏もこれまでの「マチ★アソビ」で2回ほどご来場いただき、トークショーに出ています。

・「マチ★アソビ」参加者の意識調査

これまでのアンケートの標本数は698サンプルです。パーソナルな部分では男性が70.5%、年代別にみると20代、30代が68.3%と多く、特に20代、30代の男性は51.8%となっていて、約半数を占めています。20代、30代の女性来場者は17.9%です。次に、どこから来たかについてですが、今回については県外が53.3%

で、若干県外の方が多いい割合を示しています。アクセスが良い大阪、香川、近県と合わせて、東京都、埼玉県からも何名か毎年飛行機に乗って来ていただいているというデータがあります。これらのことから、広域圏からの集客ができていているイベントになっていると思われる。また、今回は外国人が入っていませんが、毎年台湾や中国、フランス、アメリカからも参加者がおり、今回は上海アニメ協会からも16名の方が視察等に来ていただきました。次に宿泊予定についてですが、日帰りの方が59.2%、宿泊者は40.8%でした。また「マチ★アソビ」の参加回数ですが、初めてが16.6%、4回目以上が60.0%で非常に高いリピート率を誇る大会になっています。これは口コミ等による広がりによると分析しています。最後ですが、満足度を聞いたところ、大変満足している、満足であるとあわせると90.4%、次回来るかどうかは96%で、満足度と継続意識の強いイベントになってきています。

・「マチ★アソビ」の特徴

徳島駅前から眉山の方にかけて徒歩15分圏内にイベント会場を分散しているのが特徴です。地の利を活かし、眉山や新町川を活用して実施しています。例えば、新町川の橋の下美術館や、春の「マチ★アソビ」で行っている巨大なアニメバナーを掲示して遊覧船で観て回るイベント、また、眉山ロープウェイでの声優による観光ガイドなどがあります。眉山山頂にステージを組んで屋外シアター等も実施しています。橋の下美術館は、国土交通省、県、市、警察等の許可により実施しています。

また、ローカルのよさでもありますが、ゲストと参加者の距離が非常に近いことも特徴です。特に、新町橋東公園やポップ街商店街、しんまちボードウォークではゲストと参加者との距離が近くなります。メーカー同士の自由な交流も特徴で、メーカー横断パッケージの展示会、ラッピングタクシーがあります。今回は8台を受けました。徳島市バスの協力によるラッピングバスの運行や、阿波おどり空港のアニメジャック等も行っています。また、JR四国の協力を得て徳島駅をアニメジャックしたり、1日駅長を実施したりという事業も行っています。

・町とのコラボレーション

しんまちボードウォークは「マチ★アソビ」期間中、最も賑わっているところです。町とのコラボにより、水の郷百選のシンボルでもある新町川水際公園は、コスプレイヤーたちの撮影スポットとなっています。ひょうたん島を周回する「マチ★アソビRUN」や、「とくしまグルメハント」があります。「とくしまグルメハント」はビンゴ形式のスタンプラリーで、徳島市内の協力店舗にてグルメハントメニューを注文していただき、条件を満たすとアニメ作品のオリジナル書下ろしポストカードをプレゼントし、ビンゴ達成者には豪華賞品が当たるイベントです。協力店舗は、参加費用とポストカード代を負担してもらいます。商店街の店舗の参加が非常に多くなっていますので、そうした商店街にアニメ原画の展示やゲーム体験コーナーを設置したり、コスプレショー等を実施することで、非常に多くの賑わいを創出することができています。

・地域資源を活用した商品開発

アニメを活用した徳島PRを様々実施しています。徳島アニメ大使とコラボした観光ブックの発行、地元新聞でのお遍路を題材にした記事の掲載、アニメ放送のほか、徳島のお土産であるいちごバームクーヘンの販売等を行っています。昨年度の「マチ★アソビ」期

間中には、3日間で1,200個を完売しました。

また、現在、「マチ★アソビブック」のテーマに取り上げる計画をしており、徳島アニメ大使が神山町での植樹を行う予定です。

・海外アニメイベント等との連携

中国で人気のアニメコスプレイベント、「CCG EXPO 上海」において優勝したコスプレイヤーを徳島に招待したり、8月に実施された台湾の漫画博覧会で徳島の「マチ★アソビ」PRブースを設置し、映像を使いながらアニメイベントを紹介したりしています。台湾で配ったチラシ等を持って「マチ★アソビ」に来た方もいました。

・他都市のアニメイベントとの違い

町の中心部にある豊かな自然を舞台に展開している屋外型のイベントであることが売りになっています。阿波踊りをはじめとする大きなイベント開催を受け入れる県民性が、アニメのコスプレイヤーに関しても、最初からではありませんでしたが、理解し受け入れられているのだと思います。マスコミ、雑誌への露出が多く、BSフジや、地元の新聞やテレビ等において、かなり紹介等されていることも、宣伝だけでなくイベントの理解と協力につながっているのかもしれない。ボランティアもいますし、チャリティーオークションでは、アニメやゲームのレアグッズなどで盛り上がりを見せています。

・事業の効果と今後

コスプレイベントの参加者数はここ3年間で倍増していて、グルメハントのメニューも毎年増えていっています。ロープウェイの乗客数は年間のイベント開催日数6日間において、年間乗車人数の14%を占めます。1日の平均で言いますと、阿波踊りの開催時よりも多く、経済効果を生み出しています。ひょうたん島クルーズも3日間で2,500人という時がありました。「マチ★アソビ」イベントによる国内外からの交流人口の拡大が地域の活性化につながっています。国内外に向けて「アニメと言えば徳島」「クールとくしま」というイメージの強化を図り、体制をより充実させていくことで、今後も参加者の増加、訪日外国人の誘客促進につなげていきたいと考えています。

【質疑応答】

質疑. 主催がよくわからなかったのだが、vol. 1は徳島市観光協会とユーフォーテーブルの近藤光氏の参加で始められ、現在は、実行委員会形式になっていたものをNPO法人ユーフォーテーブルが設立され、どのように関わっているのか。県と市の関わりはどうか。また、公的資金、寄付、協賛金等を含めて予算はどれぐらい使っていて、地方創生加速化交付金は使っているのか。

応答. 主催の件ですが、だいたい徳島市の観光協会が主催となっています。その後いくつかの変遷を受けて、今は実行委員会形式ということで、10月開催の秋の「マチ★アソビ」は、主催がアニメ・映画祭実行委員会で、県内の代表者が構成員となった組織が1つ目の主催者です。アニメ祭り実行委員会は、ユーフォーテーブルの近藤社長を中心とする組織です。また、NPO法人マチ☆アソビも近藤社長がやっています。それと徳島県も主催者ですので、4者が主催となっていて、市は入っていません。

予算ですが、今年度については、当初予算の段階で7,500万円を計上しています。財源としては、文科省の補助金を申請し交付されることを予定しています。それからア

ニメ祭り実行委員会、秋の「マチ★アソビ」については、出店者からの出店料、企業からの協賛金です。眉山山頂でのイベントのために運行しているシャトルバスの乗車賃も資金の一つです。

質疑. その予算はいくらか。また、経済効果が算出されていれば、伺いたい。

応答. 経済効果がいくらという算定はしていません。ただ、この期間中の徳島市内のホテル、旅館は、インターネットで調べた限りでは満室で、泊まり切れぬお客様のためにホテルの方に、大部屋や宴会場を空けてもらったりしておりますし、アニメファンは自分の好きなものにお金を使う傾向があるので、そうした買い物やお土産の購買による経済効果はあるものと考えています。

実行委員会が県に計上している負担金によれば、秋の「マチ★アソビ」では実行委員会に5,500万円、春は2,000万円で、トータル7,500万円です。

質疑. 総額いくらのイベントをやっているのか。

応答. 協賛金が130万円ぐらいで、出店料とシャトルバスの運賃で500万円ぐらいです。7,500万円に500万円プラスぐらいの収入になります。協賛金も1口1万円からということで募っています。文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業という文化庁の補助事業も活用しており、全体の50%を占めていますが、満額に届かず、今年度も採択では6割ぐらいになっています。

質疑. このイベントはユーフォーテーブル有限会社を県が誘致したのか。それともこの会社がこちらに来て事業を展開したことに県がコラボレーションして、このイベントを企画されたのか。

応答. まずは、平成21年の4月に近藤光氏がユーフォーテーブル有限会社の制作スタジオを開設したところから始まっています。立地の補助金があり、デジタルコンテンツ事業に加わったことから、制作スタジオが同じ年の4月に徳島市内に開設されたという流れです。その中で県とユーフォーテーブルでアニメのイベントを開催して中心市街地の活性化を図ったらどうかという提案がなされ、両方で協働してイベントを立ち上げることになりました。

質疑. 県が誘致をしたわけではなく、たまたま近藤氏がこちらで事業を展開するということであるということは、県からの誘致の補助は一切ないということか。

応答. 徳島県情報通信関連事業立地促進補助制度がありますが、徳島出身の近藤光氏がこの補助制度を活用して平成21年4月1日に地元ビルにデジタルコンテンツ事業所を開設しました。それについてはアニメイベントとは別に補助があったということです。

質疑. 地域の経済効果は算定していないが、地方創生の一環として海外からの訪問も含めた流動人口の話があったが、インバウンドはどれぐらいか。

応答. インバウンドの数については正確には把握していません。

質疑. 徳島県は阿波踊りが一番有名で、そちらは中高年に人気があり、「マチ★アソビ」は若い人向けであり対照的だと思ったが、将来的にはこの「マチ★アソビ」をどういう方向に持っていくのか。そのために今、県として足りないもの、また市とはどのように関わっていこうとしているのかについて伺いたい。

応答. 今後の「マチ★アソビ」の方向性ですが、春と秋の年2回、5月と10月開催をいかに通年化し、年間を通じてアニメのファンの方に徳島に来てもらうかがいちばん大きな課題です。これは近藤社長も同じことを考えており、アニメを象徴するスポットが多くできれば、年間を通じて人がくるようになると考えています。いかにアニメの聖地としていくかが課題です。徳島市との連携については、現在は県と実行委員会組織との協働ですが、市の中心市街地を活用しているイベントですので、将来的には徳島市の協力も得てイベントを盛り上げていける方法を模索しないといけないと思っています。

質疑. 「マチ★アソビ」ということで平成21年頃から始めたということだが、始めるにあたって、周辺環境整備等について、駐車場や道路、トイレ等、問題が想定されるものについては、もともとあったところを活用しているのか、新たにこの事業のために整備されたものはあるのか。

応答. このイベントするために特別にハード整備をしたということは聞いていません。現在ある施設や舞台を使っています。ただし、眉山山頂でのイベントについては、仮設ステージを作りましたが、大掛かりなものはありません。

質疑. 「マチ★アソビ」で外国人を誘致するとのことだが、阿波踊りでも外国人は割と多く来るのか。外国人の受け入れは他県の受け入れとは看板1つにしても違うと思うが、いかがか。

応答. 外国人観光客を迎えるにあたっての条件整備ということかと思いますが、「マチ★アソビ」に関しては、台湾向けのビデオを作成して、台湾の方でプロモーション等を行います。一般の観光施設や市街地整備の中における外国語表記や中国語表記をする取り組みは「マチ★アソビ」ということではなく、一般的なバリアフリーの取り組みの中でやっています。

質疑. コスプレなど地域の方には理解も違和感もあるかと思うが、ファンがコスプレするだけなのか、市民もだんだん参加型になってきているのか。

応答. はじめは奇抜なコスプレで町を闊歩することに抵抗がありましたが、苦情はなかったと聞いています。イベントを行うことについて、周辺の方から多少の苦情はありました。

質疑. 市民参加は増えてきたのか。

応答. コスプレをされている方が県外の方か地元の方かはわかりませんが、中心市街地のお世話をしてくれる方が回を重ねるごとに理解を深め、コスプレイヤーでなくても期間中にコスプレをする方もいます。

質疑. アニメとの出会いで、平成21年に近藤氏がユーフォーテーブルを設立し、同年に「マチ★アソビ」の第1回目を開催しているが、会社設立と同時にこういうイベントをやっていききたいという意図があったものなのか。

応答. その当時のことはわかりかねますが、少年時代を過ごした地元を何とか盛り上げたいという思いはあったと思いますし、イベント企画についても考えられていたのではないかと思います。

質疑. 当初の来客見込みはどれぐらいだったのか。もしくは目標値を満たすぐらいの来客数を確保できたのか。

応答. 入場料を取っているイベントではないので、当時の数値目標はわかりません。

質疑. 予算7,500万円とのことだったが、これは文化庁の補助金も使った金額か。県単独ではどのぐらいの負担なのか。

応答. 7,500万円のうちの2分の1が国、残りの2分の1が県のお金です。

質疑. あくまでもイベントの費用として出しているということか。

応答. イベントの経費です。

質疑. 若者の集客につながったとのことだが、小さい子どもが来るから当然親もついて来るとか、親と一緒に子どもも来るというような子連れの参加についてはどうか。

応答. 春と秋の2回を通じての現場の様子からは親子連れという印象はありませんでした。親子でコスプレしている場面もあったが、親子連れで賑わうということではないと思います。

質疑. こういうことが好きな方の中には住んでしまおうという方もいるのか。

応答. 「マチ★アソビ」イベントが契機となって徳島に移住したケースはないと思います。

質疑. 商品開発について、ロイヤリティーを何%使って開発させるとか、他の商品でも大手アニメのキャラクターを使ってロイヤリティーを払いながら商品開発を仲介しているようなことはあるのか。B級感が漂っているイラストを一流のクリエイターに作ってもらえるような企画はしていないのか。コスプレイヤーは本物のアニメのグッズは欲しがるが、町ではあまりお金を使わないと聞くのだが、何か感じるころがあれば教えていただきたい。

応答. バームクーヘンに関してのロイヤリティーは7%でやっています。声優に参集してもらい、限定販売しました。それ以外に県内のお菓子の業者とコラボして、「マチ★アソビ」の時期にパッケージをアニメのデザインにして販売しています。その回の限定ということで作っています。

質疑. 「マチ★アソビ」のコンセプトが歩いて15分圏内ということで、エリア設定としては駅前、駅周辺ということによいと思うが、イメージはどう整備していくのか。

応答. 阿波踊りのポスターにもアニメを採用して、アニメ大使に阿波踊りの格好で登場してもらおう等、阿波踊りについてもアニメを活用したポスターを発行しました。

質疑. 徳島市全域でイメージを持たせてやっていることなのか。

応答. エリアを市域全体に拡大するというよりは、アニメによるイメージを使って、阿波踊りをPRしていくという活用の仕方になります。

(2) 徳島県神山町 特定非営利活動法人グリーンバレー

平成28年11月18日(金)、午前11時から午後4時まで、以下のレクチャー等を受講した。

① 11:00～12:00

「創生戦略レクチャー」

講師：一般社団法人神山つなぐ公社 代表理事 杼谷 学 氏

② 13:30～15:00

「創造的過疎レクチャー」

講師：特定非営利活動法人グリーンバレー 理事長 大南信也 氏

③ 15:00～16:00

「サテライトオフィスツアー」(NPO職員による現地案内)

① 創生戦略レクチャー

【概要】

私は役場の職員で20年間行政に携わっていましたが、今、神山つなぐ公社という一般社団法人へ出向し、地方創生の事業を専属でやっております。途中、町で作成したビデオを流しながら、神山町の地方創生戦略について説明します。

○地方創生の現状・経緯

一般社団法人神山つなぐ公社は10人で組織を動かしており、役員は5人います。私が代表を取らせていただき、NPO法人グリーンバレーの理事長である大南信也氏、西村佳哲氏、後藤太一氏、監事の山口純一氏です。西村氏がキーマンであり、4年ぐらい前に「イン神山」というグリーンバレーのホームページを作成した時に一度関わり、その後、年に2、3回関わるようになり、ここへ所属するようになった方です。西村氏のつながりで後藤氏がおり、福岡県から神山町へ来て手伝いをしています。残り5人のスタッフは、岡山出身で九州の大学を出たのち東京で働いたが今年から神山にきた者、東京都や滋賀県からきた者等がおり、1人だけ神山町出身者で、設計士として所属しています。

神山町は平成16年度に全戸光ファイバー網を設置しました。全戸というのは希望のあった世帯なのですが、その当時から85%程度の加入率でした。なぜかといえば、徳島県はテレビの放映に関して大阪の電波を受けているので、地デジに変わると、受信しにくくなりテレビが見られなくなるということがあったため、年配者が多いのでなんとかしよう、これからはインターネットの時代であるということで、10年ぐらい前に四

国で初めて、全国でも3例目ぐらいに早く家庭まで光ファイバーを設置しました。これにより、インターネットとIT電話、ケーブルテレビを見られるようになりました。当時は月額2,500円、現在は消費税が上がったこともあり2,700円ぐらいですが、これを続けています。整備は神山町が行い、整備したものを市内の大手であるケーブルテレビ徳島に技術提供いただき、貸し付けている形を取り、貸付料で維持経費を賄っています。

このような基盤整備ができたのち、次に、フリースポットを使える場所を整備しました。これはキャンプ場内ですが、民間にも声かけをして、キャンプでもこれからはパソコンなり仕事を持ち込む場合もあると話し、町内のいろいろなところでフリースポットをつくり活用できるように整備しました。こうした整備が今の「サテライトオフィス」につながっています。

当初は「サテライトオフィス」ということは想像もしていなかったのですが、空き家を改修して空き家の紹介をしていくうちに、こうした基盤があったからこそ「サテライトオフィス」に発展してきました。

○まち・ひと・しごと創生戦略に関して

内閣府は人口減少の傾向から2100年には現在の半分以上の5,000万人を割り込むという推定もしています。若い世代は東京に一極集中し、都市部では低出産率となり、地方の活力がなくなることで大都市も衰退するという懸念から、国は、地方に仕事をつくり、新しい人の流れをつくって若い世代の結婚・出産・子育ての希望を叶えるような施策をすれば補助金を出すという政策方針を出しました。これを受けて、神山町総合戦略においては、大事にしてきたことが2つあります。1つは、新しいアイデアは新しい組み合わせから生まれるということ、もう1つは、実行する意欲と力のある人が明確に存在するという事です。これらを重点項目として政策を検討しました。

・アイデアは新しい組み合わせから生まれる

従来の会議の形を変えていこうということから始めました。神山町の場合は、コアチームという中心になるメンバーと実際に作業をするワーキンググループに分けました。コアチームには町長が入り、もらった案を即決できる機能を持たせています。私も入っていますが、8人のメンバーからなります(一般社団法人神山つなぐ公社役員4人在籍)。その下にくる組織であるワーキンググループは、町役場の者と住民等からなる組織で、男女半分ぐらいの感覚で、30歳代を中心に考えました。40歳代もいますが、基本は30歳代、28人です。10年、20年先を背負っていくような人材育成ということで、ここに加わり、展開を見守ろうという形です。神山町のように小さなところは、役場が変われば職員の意識が変わり、地域が変わっていくということがあろうかと思っています。似たような取り組みの最先端である島根県海士町を参考にしました。メンバーは、神山町にもともと住民票のある者、移住してきた者、住んでいないが勤務している者で、大阪からの移住者もいれば、製材所の者、教員、温泉関係者、県民プラザやJA等に勤務の者等多様で、お見せするビデオについては映像事務所の者が主につくっています。

・会議体の改革

昨年2015年の7月に会議を開始し、町長を中心に勉強会を重ねてきました。小さ

いグループをつくり親密さを増すよう努めてきました。会議を始めてすぐに「地域の未来を考える高校の可能性」と題したタウンフォーラムを行いました。150人ぐらい集まりました。次に勉強会をやり、その後は勉強会と公開勉強会を交互に1週間に1回ぐらいの間隔で行い、秋口まで勉強しました。それから小さなグループに分かれてそれぞれ別の考えで作業を行い、発表会をしました。ここで発表されたものをさらにブラッシュアップし、11月2日に町のキーパーソンに集まってもらって本当に実行できるようなものをプレゼンしてもらい、12月14日に最終会議をして計画が出来上がったものです。会議等ではできるだけ少人数で話が聞けるようにグループ分けし、会話、発話がしやすい環境をつくっています。このようにやり方が違ってくれば結果も違ってくるのではないかとこのところ、新しいアイデアが生まれてきたと思っています。

次に大事な、実行する意欲と力のある人が明確に存在することについては、結局、よくできた計画をつくっても実行できなければ意味がないので、むしろ計画はいつでもよくて実行することが大事だと捉え、グループに分かれたのも、中心になる人物を探し、担い手の発見をしていく目的がありました。住民のメンバーへは、今の仕事を変えるとか、ステージを変える機会の到来であるとか、人生を変えてこのプロジェクトに挑んでみませんかと声かけをし、行政職員に対しても自分の意思で異動できるチャンスで、やりたいことを提案すれば異動を検討する、公務員を辞めて新しい仕事につくこともできる等の投げかけもさせていただきました。

ここから生まれたのが、一般社団法人神山つなぐ公社、株式会社フードハブ・プロジェクトという2つの組織です。この2本を軸に地方創生を動かしています。参考までに申し上げるとつなぐ公社の年間予算は現在1億円です。そのうち人件費が3,200万円、事務費800万円、事業費6,000万円です。この事業費は民家改修等のハード事業が主です。今年度は加速化交付金5,700万円をいただいています。来年度以降は新型交付金8,500万円の内示をいただいておりますので、これから4、5年の地域再生計画をたてて内諾をいただいているという状況です。

役場が動かないと地域が動かないので、神山町役場とつなぐ公社の両輪で地域を動かしていきたいと考えております。そのために神山つなぐ会議というのを2週間に1回開催し、夕方5時半、通常勤務後、皆に集まってもらい、2時間から3時間のミーティングを重ねています。視点の多様性に気付くよう、小さなグループになって説明者に対してどう感じるか、自分の言葉でどう発話するかという会議のあり方です。4月からやっています。

・神山町の人口ビジョン

全国で消滅の可能性が高い町の20位以内に入っている町です。何もしなければ2060年には現在の人口の6分の1になってしまうという見通しです。実際どういうことが起こるのか、ワーキンググループで想像し、その後、平成19年に神山町移住交流支援センターが出来てから年間24人が転入してくるようになり、何かやっていけば人口にも比例していくということが実証され、現在は年間44人を受け入れようという計画です。

プロジェクトの基本方針としてまちを将来世代につなぐということを掲げ、人は可能性が感じられるところに集まってくるので、そういう地域をつくっていくこと、お遍路

文化、接待の文化から関係性が豊かで好奇心のある神山町の人の特徴を活かし、まず魅力ある町として若い人が集まるようにするという事等を考え、子どもが受ける学校教育や、子どもたちから見て大人が楽しそうに生き生きと働ける場所があるという状況づくり、町外に人口やお金が流出しない仕組み等を検討し、住宅や、学校教育等に施策として落とし込んでいく22の政策を具体的に打ち出しました。

実現したいことは、多様な人材がいるということです。そこから関係性とそれを支える場が生まれ、新しい活動や仕事が生まれ、ここは楽しそうだなということになっていき、活性化すると考えています。

○プロジェクトの進捗状況

・集合住宅プロジェクト

町の中心部に中学校の寮があったのですが、そこを新興住宅地に変えていこうということでやっていますが、解体で発生するコンクリートがらを産業廃棄物として処分するとお金がかかることから、自分たちで細かくして埋めていくことを考えました。地域の木を使った木造住宅で建築し、植栽も四国でいちばん植物に詳しい先生のアドバイスのもと、地域にもともとある植物を植えて育てていきたいということで取り組んでいます。国の緊急雇用対策事業も活用しながら行っていますが、事業終了後も町に残って仕事をしてもらえるようノウハウを身に付けて地域で仕事を続けられるようにしたいと思っています。

・人づくり

保小中高連携の地域教育ということで取り組みをしています。保育園、小学校、中学校、高等学校の先生同士が交わる場所がありませんが、保護者としては、保育園から小学校、中学校、また、高等学校まではどう継続して教育されているのかが気になるところです。そこでまず連携をとりやすくするため、それぞれの先生たちが仲良くなってから考えようということで、「先生みんなでごはん」という取り組みをしています。学校は少ないのですが、町外の先生も町のこと、地域のことを知るといことも大事なことでないかと思っています。

・孫の手プロジェクト

高齢化率50%、一人暮らしの高齢者が多く、一軒家で暮らしている方が多いので、生垣も多く、周りの畑の草刈りもできない人が多くなっています。そのためシルバー人材センターに非常に多くの人から依頼がきて対応がしきれないということもあり、町内にある高等学校の造園土木科の生徒による実習を兼ねた有料ボランティアとして、高齢者の住居の庭木の手入れを行っています。

このプロジェクトは高齢者の困りごとを解決するだけでなく、交流プロジェクトです。実習の合間に休憩を入れ、依頼主である高齢者から話を聞いたり質問をしたりする時間があります。高校生と高齢者が会話することが大事なことだと思っています。高校生にとって新たな気付きもあるようで、休憩後の実習はより意欲的に取り組んでいるようです。学校外の先生がいない場所で活動するため、自分で考え、手応えと自信をつけることができます。

【質疑応答】

質疑. 暮らしていくうえで収入はどうなっているのか。

応答. 都会と違うところは家賃が安いところと、お裾分けをもらうというところで食べる分には困らない。子どもの教育にお金がかかってくるとそれなりに苦しくなりますが、公社からの依頼によるお金が入っているでしょうし、県からの仕事を受けたりして、お金の心配はならないようなところです。

質疑. 他から移住されてきた方で仕事をしている方もそのような感じか。

応答. サテライトオフィスで仕事されている方はそれなりに自分の仕事を持っています。一つのところではなく、いろいろな所から仕事を受けているところもあります。例えば、3Dフリスビーの寺田氏は有名メーカーから依頼を受けてパソコンでモデルをつくり、卸しているようです。

質疑. 農業はやっていてお裾分けもあるかもしれないが、肉や魚などはどう暮らしの中でやっているのか。

応答. スーパーで買っている人は多いです。道の駅では週に1回新鮮な魚を販売しています。肉屋が1店あり繁盛しています。ほとんど市内のスーパーです。

質疑. 50%が高齢者ということで、スーパーに行きたくても車がないといけないだろうが、どうしているのか。

応答. 徳島市内の店屋が移動販売車という形で入ってきています。

質疑. 収入面では農業収入が多いのか。

応答. 第1次産業は衰退していて、第3次産業の方が上回っています。

質疑. やり方が違えば結果が違うということで、従来の市民参加の協議会、審議会でなく、職員と町民、女性も半分という視点に立てたのは、公社の方から言われたことなのか、どういった議論の積み上げの結果なのか。

応答. まだ公社が立ち上がる前なので、理事である西村氏の考えが大きい所です。高齢者の施策はいったん置いておき、次の若い世代の施策をやりたいということで、課題は多く、もう少し厚みを加えたいと思っています。

質疑. 町議会はどういう存在か。

応答. 議員研修をやりながらプロジェクトについて説明し、進捗状況も報告しています。

質疑. 集合住宅はこれから移住する人のためのものか。

応答. そこまでは考えておらず、当然、地元の人のためのものです。地元の人がいるからこそできることがあると思っています。

質疑. 何世帯か。町営か。また、家賃はどのぐらいか。

応答. 21世帯で、町営住宅です。公営住宅法の中のものではなく、町の過疎対策事業債

を使って独自に建築しています。木造2階建てで80平米ぐらい、家賃は検討中ですが4万円ぐらいでできないかと考えています。

質疑. 移住してくる場合の経費については、町からの支援金のようなものがあるのか。

応答. そうしたものはありませんが、家の改修には補助金がつきます。行政はお金だけで解決しようとはしますが、大事なことはNPOの活動であったりするわけですが、お金があるからできることもあり、3分の2の補助が100万円までは出ます。

質疑. 現在、空き家はどのぐらいあるのか。

応答. 600軒ぐらいあり、そのうち使えるものは10分の1ぐらいです。

質疑. 今の代表理事として町からきているということは、町からの連携はすべて理事が務めているのか。

応答. すべてというわけではなく、一緒に行政の職員もミーティングに加わってやっており、集合住宅でも管財と企画調整の担当が加わっており、大事なところでは総務課長や町長も入ってやっています。ミーティングの時間をたくさん持ち、時間をかけてよいものをつくろうとしています。

質疑. 移住してきている方の職種と、お試しの期間のようなものがあるのか知りたい。

応答. 職種はいろいろで、就農している方もいますし、独自のやり方でインターネットで販売したりという方もいます。お試しについては1軒しかないので、1週間や1カ月ぐらいです。今、民家改修プロジェクトも動いていて、お試し住宅を整理していくところです。

質疑. 地方創生加速化交付金を活用しているかと思うが、例えば国の交付金がなくなってしまう等、考えられることはないのか。

応答. 地方創生加速化交付金がなくなってしまうことは考えられるので、自立ということが非常に大事で、一つの目標です。

質疑. インターネットで見ると、神山アーティスト・イン・レジデンスというものが1999年からスタートしているようだが、現在も続いているのか。

応答. 3人の作家を呼び、8月から11月当初まで作家活動をしてもらえるよう、学校で子どもと交流したり、いろいろなツアーを組んだりして、地元の人の手作りでやっています。

質疑. 観光資源は何があるのか。

応答. 四国お遍路、温泉、それと自然を見に来る方が多いです。

質疑. 鮎喰川（あくいがわ）というきれいな川があるが、映像では先生が鮎が上がつてこないと話していてもつたいないと思ったのだが、観光の名勝にはならないのか。

応答. 川は大事だと思います。鮎喰川は水が減っており、原因は山の荒廃です。植林が多いのですが、木材が低迷して間伐もできず、山の保水力がなくなっていることは大きな課題です。

質疑. 神山杉というのが町の木になっているが、建築物としては使えないのか。

応答. どれだけのものかはわかりません。神山町は他よりも20年早く植林したようで、ほかは60年経過しているところ、神山町では80年経っており、どうするかということ悩ましいところです。

② 創造的過疎レクチャー

当日のレクチャーは、他の団体等の参加も多く、当日は我々を含めて50人ほどの参加があった。講義は、大南理事長がパワーポイントのスライドを用いながら進められた。

以下、講演内容を報告する。

【講演内容】

神山プロジェクトということでお話ししたいと思います。

「創造的過疎」という言葉を2007年に作りました。この「創造的過疎」とは何かというお話からしたいと思います。

日本の総人口が2008年から減少し始めてます。そうだとすれば、これまでずっと過疎化になってきた神山のような場所で、「数」を解決するのは無理だろうと考えました。「数」ではなくて、中身は変えられるかなあというのがこの「創造的過疎」の考え方です。だから、若者とか総合的な人材を育成することで人口構造の健全化を図ったり、あるいは神山のような中山間というのはこれまで農林業だよねってことでいろんな産業政策を行ってきたけれども、あまりうまく回っていかないことが多くなるような気がします。そこでがらっと発想を変えます。一方で、特に徳島県なんかはICTのインフラというのが県内くまなく光ファイバーが引かれているわけです。そういうようなものを活用しながら多様な働き方が可能なビジネスの場としての価値を高めること。農林業だけに頼らない、均衡のとれた持続可能な地域が目指せないかというのがこの考えです。日本の過疎地地方には大きな課題があります。一番大きいのは、雇用がない、仕事がない。このことがいろんな問題を引き起こしていきます。例えば、雇用がない、仕事がないから移住者を呼び込めないという問題があります。そうだとすれば、仕事を持った移住者に来てもらう、あるいは仕事を作りだしてくれる企業者を呼び込めばこの問題って解決するんじゃないのってというのが「ワークインレジデンス」の考え方です。さらに、企業によっては場所を選ばない企業があるはずやと。そういう企業にオフィスを置いてもらうっていうのが「サテライトオフィス」。さらには「神山塾」ということで、職業訓練なんかも積極的にやることによって後継人材の育成を図る。

これ、神山町です。1955年に町が生まれました。当時の人口が2万1,000人。昨年の国勢調査、60年後は、確定値では5,300人。ということは、25.23パーセントです。言わば、一番多かった時より4分の1に減っているわけですよ。今日来られておる皆さん方のどのまちよりも過疎化が進んだわけじゃないかなと思います。高齢化

率が49.5パーセント。ということは、65歳以上の人の比率が49.5パーセント。ほぼ平均年齢65歳ということです。数値的に見ても絶望的な数字です。皆さん、これ見られて、神山に視察に来たん間違ごうたなぁと思われた方もおるんじゃないかなあと。ところが、今の神山の状況を見てみれば、こんないろんな問題だらけなんだけれども、何か可能性を感じさせるっていうのが今の町の状況じゃないかな。例えば、これは社会動態人口です。当然過疎の町なんで、転入数を転居数がずっと上回っている。2007年の10月、神山町に移住交流支援センターっていうのが置かれる。この運営を、神山町の場合は役場ではなくて民間の団体であるグリーンバレーにこれが任せられます。そのあとから、こういう数値が改善。2011年度に初めてこれが社会増になったと。その後また社会減になって少し最近拡大しています。このあたりの一番大きな要因は、すぐに使える空き家がほぼもうなくなってしまったっていう状況がありました。ですから、地方創生の創生戦略の中では、若者世帯向けに集合住宅を作ったり、あるいは空き家の改修に町自身が積極的に融資して行こうという方向が今打ち出されています。いずれにしても、数値的にも一時より大分改善したわけですね。ところが、創造的過疎の考え方は数ではなくて内容です。この間神山に移住交流支援センター経由で入ってきた人が161名いるんだと。その人たちは平均年齢30歳前後。だから、非常に若い層の人たちが入ってきておるから、多少の社会減を起こしておっても、町の活力、力は失われてないんじゃないかなっていうとらえ方です。数字をそのまま、まるまる見るんやなくて、真水でとらえていくってことが重要になるんじゃないかな。それとともに、ITベンチャー企業、東京に本社を置く企業が今16社神山にサテライトオフィスを。多分、北海道とか埼玉から来られた人はわかると思うんだけど、羽田から1時間ちょっとで徳島空港。ここに「シェアカー」を置いてあります。これに飛び乗って1時間ちょっとで神山。だから、羽田をスタートしてから2時間半ぐらいで神山には到着できる。徳島大学では、今年の5月からサテライトオフィス「神山学舎」というのを開いた。大学生や大学院生の講義が神山で行われています。さらには、徳島県庁、今年の4月から「未来創造オフィス」ということで、県庁職員2名が神山に常駐しながら神山の情報の発信とか県の職員研修とかを行っておるってなことです。

こういう動きが、アメリカを代表する新聞社、ワシントンポストにも取り上げられる。去年の5月、1面から8面まで結構大きく取り上げられた。こういうような大きなメディアに取り上げられるとすぐに反応が返ってきます。去年の4月半ば、カリフォルニアから4人家族が神山に家探しに来ます。2週間僕らと一緒に探して家が見つかった。そこを改修して神山に住んでおって、あるいは今もアメリカのポートランド、シカゴ、オーストラリア、イタリアなんかから神山に移住して来たいっていう人たちが現れた。一番多いパターンはどういうことかというと、外国人の旦那さんを持たれとって、日本人の奥さんというパターンが一番多いです。そういう人たちが、奥さんの里である日本に永住帰国するときに、まあ、海外っていうのは結構自由な雰囲気漂っているわけですよ。だから、窮屈でない地方を探しています。そういう中で、神山が選ばれとる、ということになります。

地方省庁の地方移転という話が結構話題になってます。文化庁を京都に、って本決まりです。消費者庁は徳島に、というところで話が進んでいます。今年の3月、坂東消費者庁長官を含む職員10人が、3月の5日間ぐらい神山の中で試験的な勤務、実証実験をやりました。今から二年前も内閣府の職員のテレワークの実証実験が行われたりというような

ことで、ICTのインフラというのは結構神山は整っているのです、そういうような試験の場として活用されています。

神山におけるいくつかの建築の改修事例があります。例えば長屋をサテライトオフィスに改修した例、「WEEK神山」ですね。これは、宿が新築されると。こういうような改修について、8軒の改修あるいは新築について、この設計を担ってきたのは建築家ユニットの「BUS」というグループ。この子たちが今年、今、ベネツィアで行われている「ベネツィア・ビエンナーレ国際建築展」の日本代表になりました。日本からのテーマの一つとして「創造的過疎」がテーマになっています。今、神山の改修事例が半年間、もう27日で閉幕ですけれども、ベネツィアで世界に紹介されているというところです。今年の5月28日、私もオープニングに合わせてベネツィアに行ってきた。このスライドは、神山の映像展示の前で阿波踊りを踊っているところです。

じゃあ、こういう動きは何から始まったんかという話です。スタートはこの一体の人形からです。1927年にアメリカから日本に送られてきた友好親善の人形です。「青い目の人形」と呼ばれていました。当時日米関係は非常に険悪。そのあたりを少しでも子供世代から変えていきたい。で、日本の子供たちは人形が好きだから、このひな祭りに向けて人形を送ろうっていう運動がアメリカで起こりました。1セント募金なんかが行われて、結果的に1万2,739の人形が仕立てられました。それが1927年、昭和2年の2月に横浜の港に着くわけです。受け取った文部省はその人形を全国の小学校、幼稚園なんかに配布をしていくわけです。非常に珍しい人形です。大歓迎だった。ところが、1941年、太平洋戦争が始まった。今度は人形がキャンペーンの対象になった。敵国から送られてきた人形だから焼いてしまえ、壊してしまえ、竹で突けみたいなキャンペーンが全国で行われ、ほとんどの人形が壊されていくわけです。今現存するのが全国で約320体。そのうちの1体の「アリス・ジョンストン」という人形が神山の神領小学校、私の母校なんですけれども、ここに残ってます。じゃあなぜこの小学校にこの人形が残ったのか。当時の女性教師だったアベミツエ先生という人が、人形に罪はないだろうというので、この木箱に入れて用務員室の戸棚の奥に隠しておったから、結果的に。1990年、私の長男が小学校に行き始めた。10何年かぶりでPTAの会合に呼ばれて、4月の夜に小学校を訪れるわけです。そうすると、その人形が廊下に飾られてありました。校長先生にいろいろ見せてもらっていたら、人形がパスポートを持っていた。このパスポートの裏側に人形の名前とともに出身地、ペンシルバニア州ウィルキンズバーグっていう町の名前が書かれていました。63年前に送られてきた人形です。10歳の女の子が送ってくれたとすれば、その人は73歳やったらまだ生きておられるかもわからんなあという思いの中で、じゃあこの人形誰が送ってくれたのか探し出してやろうというので、ウィルキンズバーグの市長さん宛てに送り人探しを依頼した手紙を送りました。そうすると半年ぐらい探してくれた後、見つかりましたという連絡が入りました。人形を贈ってくれたのは、人形と同じ名前のアリス・ジョンストンさん。当時の西ペンシルバニアの聾学校の先生をされよる人でした。送り主が見つかったわけだから、人形は一度神山にお嫁さんに来たのと同じやから、人形を里帰りさせようよという運動を起こしました。で、1991年の3月3日、ちょうどひな祭りの日に、アリス里帰り推進委員会っていう実行委員会を作ります。それから5カ月後です。住民で30名の訪問団を結成し、この人形をアメリカに連れて帰ったって

うのが、そもそもグリーンバレーのスタートの時です。この時に、5名ぐらいの、後にグリーンバレーの中心になるような人間が同じ成功体験を共有しとった。同じ空気、雰囲気味わっていたというのが、非常に大きかったかなあとと思います。例えば、これは38歳の時の私になりますが、私だけがこの里帰りに参加しとったとすれば、帰ってきて、自分の言葉で仲間にならなければならない里帰りだったかっのを伝えるわけです。「どうだった?」「面白かった。」「どういうふうに?」「とにかく面白かった。」でも、「とにかく」では通じんわけですよ。ところが、同じ体験をした5名の中では、「あの時、とにかく」という話で通じるということです。だから、いろんな地域づくりとかプロジェクトもそうやと思います。一番重要なのは、複数の人間、できれば5名ぐらいの人間が、同じ成功体験を共有したり、そういうような空気、雰囲気を一緒に味わうってことが重要なんではないかなと思います。ここで5人、結構重要だと思います。二人の場合だったらどうなるかってことですね。例えば、片方が落ち込んだ時にもう一方も引きずられるってことですよ。だから5名ぐらいおったら、必ず脳天気な人間ってのが含まれてます。だから悲観的な人間が3人おっても1人が、「いや、大丈夫や、前に進もう」とってことで、それが持続されるってことになるんじゃないかなと思います。私のすぐ隣にいるのが、森さん。森さんは、神山町の前商工会会長です。真ん中には、佐藤さん。佐藤さんは、現商工会会長で、当時の神領小学校のPTA会長で、副会長が私。佐藤さんの前の会長が岩村さんって人で、結構PTAの役員とか、商工会青年部で活動しとった人間がベースになっている。神山の事例をずうーっとお話しすると、一番多い質問、神山町役場の影が全く見えて来ない、役場は何をやっとんのですか?みたいな形が多い。実は、この人は大西さんという人です。当時の神山町役場の企画担当の係長です。その後、総務課長、参事、最終的に副町長で職を終えられた人です。この人は何をどういうふうにやってくれたんかというのと、例えばこの施設、神山町の農村環境改善センター、まあ町でいえば中央公民館みたいな施設です。この施設を、民にできることは民に任せようってことで、指定管理に出してくれた。結果的にグリーンバレーがそれを受けて、事務局を受けるってことになります。事務局がNPOで置けると、今度は活動がさっとそれで広がっていくわけですよ。さらに神山町移住交流支援センター、これは、移住の話ってのは、役場がやるよりも住民に任せよう方がいいよというので、これを委託に動いてくれたのも、この副町長時代だった大西さんだったということですね。だから、神山町の役割ってのは、結構、縁の下力持ち。黒子になっていろんなことを支えてくれた。住民団体が動きやすいような状況を作り出してくれたってところにあるんじゃないかなと思います。

これで1年越しのアリスの会はミッションを終えるわけですよ。神山町国際交流協会ってのに衣替えをします。まずは、人形で一つきっかけができそうだから、人形のことをいろいろ掘り下げれば、神山を何かわくわくするような場所にできるんじゃないかなって、人形のことをいろいろと調べていった。ところが、3年たっても4年たっても、あんまり変わらんわけですよ。せっかくだらいい材料を見つけたと思ったのに、神山は、地域づくりとかでは前に進んでいかんのかなあと始めておいた時に、転機が1997年に。徳島県が総合計画を発表した。この中で神山を中心とした地域に、徳島国際文化村を作りますよということ、当時の徳島新聞のわずか3行の記事が載った。その記事を見た時、国際交流協会のメンバーで話し合ったことは、これから10年後、20年後を考えたときに、県と

か市町村の作ったような施設であっても、必ず住民自身が管理運営するような時代が来るだろうと。そうだとすれば、与えられたものだったらうまく運営できないから、自分たちはこんな国際文化村が町に必要なだということを徳島県に提案をして行こうっていう動きを始めました。このあたりから、少しずついろんなことが変わり始めます。これ以前、これ以後でがらっと町に対する見方が一変して来とるわけです。これまでは、例えば、イベントとかプロジェクトを続けておれば、その向こっ側に何か見えてくるんだらうと。予報で動いとったってことです。それが、結果的に見えて来んかった。じゃあ、ここに至っては、まず10年後、20年後のわが町の姿をイメージしたと。そこから逆算をして現在に下ろしてきて、今何をやっておかんかったらいかんのかってのを考える。だから、町を見る立ち位置を、これまでは現在からばかり見ておったけれども、未来から見始めたら違う姿が見えてきましたよっということ。そこで、国際文化村委員会という民間の25名ぐらいの実行委員会を作りました。民間で作ったけれども、うち5名ぐらいは神山町役場の企画の担当の人たちにも入ってもらっています。この時に、例えば、大西さんみたいな人たちに一緒に入ってもらったということですね。その時からいろいろ情報共有とか理念の共有ができたから、結果的にそれがプラスに働いていくってことになります。この国際文化村委員会の中でいくつかのプロジェクトが育っていく。それらを統括運営するためにグリーンバレーが誕生した。ところが、国際文化村委員会を開いたときに、困ったことが起きます。困ったことが起きたというよりは、困った人がこの会合に現れた。誰が現れたか。アイデアキラーってわけです。アイデアキラーって皆さんわかりますか？こういう人たちです。過去の失敗などを例に挙げながらアイデアを破壊する。会合しても組織も必ず15パーセントか20パーセントぐらいそういう人がいます。何をやるかという、例えば、誰かが一つアイデアを言うと、アイデアキラーたちは、あんたが言うのは5年前に出てきた話や、あの時はうまいこといかんかったと。うまいこといかんかった理由は、いいないいな言うたけども誰も先頭に立たなかつた。今度は違う人が、違うことを言う、あんた言うたことは3年前に出て来よる、あの時駄目だったのは、お金がない予算がないと言うて、前に進まんかったと。とにかく出てくるアイデアを自分たちの過去の失敗に照らし合わせて結果論で否定していく。非常に効き目がある。なぜ効き目があるか。この失敗の経験をみんな共有しとるわけです。その傷口にあらためてスポットライトを当てる。だから駄目なんだ、結果が出とるだろと言われたら、納得させられる。このアイデアキラーにはある種の特徴があります。二言目に言うことは、難しい問題だと。それでいいアイデアを潰していく。アイデアキラーは当然会社にも現れます。今日来られとる皆さん方以外の会社にアイデアキラーが現れると、俺は聞いていないと。これもアイデアキラーの言葉。さらに行政にも現れます。今日来られとる皆さん方以外の行政にアイデアキラーが現れると、前例がないということでもいいアイデアを潰していく。普通、人間が前例のないことに直面したら困ったなあって感じる。なぜ困るんか。前例がないからそれに対処するマニュアルがないってことです。こういうときはこうしなさいっていう道順が示されてないから、はてどうしよう、困ったなあっていうことやと思います。ところが、この前例がない困ったなあやなしに、逆に時代の歯車を回すチャンスが来たというふうに考えるべきやと思います。なぜでしょう。前例があるか静かに長時間観察しよつたら、いつか必ず誰かが前例をつくってます。そうだとすれば、チャンスをなぜ生かさんかったってこと

やと思います。前例のないことに前例が生まれると、またアイデアキラーはまた口を開きます。俺、最初からあんなことわかつた、みたいな話をするわけですよ。分かつたならなんでやらんのですかっていうことやと思います。

このアイデアキラーには2種類あるような気がします。一つは悪意のアイデアキラーです。悪意のアイデアキラーというのは、最初からアイデアを潰したろ〜みたいな感じで趣味にしとる人。これは救い難い。でももう一個、善意のアイデアキラーってのは、結構誰でもが陥りやすいアイデアキラーです。例えば、会社とか役所なんかに入って15年、25年経って、いろんな経験をしてきます。ってことはいろんな失敗もしてくるってことです。その経験が邪魔をしていくってことです。例えば、新入社員とか新入職員の方が入ってきて、結構尖ったことを言うわけですね。「先輩、自分もこんなことをこれからやりたい。夢があるんです。」というような。すると善意のアイデアキラーが現れてきます。あんなあつてことで、親切に言うといたげるって話。俺も実はやったことがあるんだ。我らも10年前にうまいこといかんかった。だから、これやってもうまいこといかんから、止めとったほうがいいよって話。これ、善意のアイデアキラーになる可能性があります。なんでか言うたら、10年前と今と、客観情勢全く違うばかり。去年出来んことで今年できることたくさんあるわけですよ。でも人間って1回その経験をしたら、それがトラウマになって、それが善意っていう形で、止めとったほうがええよ。これは、アイデアを潰す可能性があります。だから、それを防ぐためには、このあたりに、もう一人の自分ってのを置いといて、俺ももしかして善意のアイデアキラーになってないかなあつていう見張りをする必要があるんじゃないかなと。じゃあアイデアキラーはそういうふうに、組織とか会社とか会合とかあるいは行政だけに現れるかって。そうではない。私たちの心の中にもアイデアキラーがいます。例えば、地域づくりを考える時に、最近だと、神山は特別なんや見たいなものの言い方をする人がいます。うちの町は、山奥だから、島だから、雪国だからお宅の場所とは全然条件が違うんですと。この言葉を吐いた時点でほぼ可能性ゼロになってます。これなぜでしょう。山奥であること、島であること、雪国であることを自分たちの力で変えられるかどうかの問題です。人間の力では変えられないことです。変えられんことをいくら議論したってそこから生まれることは何もないということだと思います。変えられんことはもう受け入れるより、予見として受け入れるより仕方がないということやと思います。じゃあ、アイデアキラーがいろんな局面に現れたら、やっぱりやっつける必要がある。やっつける方法は？グリーンバレーで使ったのは二つの言葉です。一つは「できない理由よりできる方法を考える」。「もしその方法が見つかったら、とにかくやっつけてしまおう」と。できない理由よりできる方法をというの、単なるものの見方だけです。同じものを見た時に最初から決めつけて、できないと思ってみるのか、できないできない思っても、何かいい方法あるかと。結果は全く違ってきます。人間オープンで開放的に物事を考えていいアイデア浮かびます。ところが、閉塞し始めたら絶対いいアイデアは浮かばんと。仮に、このアイデア、方法が見つかったとしても、そのままにしても何の変化も生まれません。まずは、やっつけてしまおうと。やることによって、物事の展開を変えて、そこに炙り出されてくる問題・課題ってのを一個一個詰めていくほうが、よほどいろんなことがスムーズに進んでいきます。で、とにかく始めると。阿波弁、徳島弁で直すとどういう言葉になるんかという、「やったらええんちゃう。」っていうことで

す。これがグリーンバレーで共有された物事の考え方です。だからいろんなことをやるたびに、非常にフットワーク軽いです。とにかく、思い考えあぐねるよりは、まず行動を起こして、そこから突破口を見つけていくってのが、グリーンバレー流。「やったらええんちゃうん」。同じ言葉を話した関西人います。サントリーの創始者の鳥井新治郎さん。あるいは松下幸之助さん、何て言ったか、「やってみなはれ」ですね。だから、明治も大正も昭和も平成も、物事の真理は変わらない。とにかく新しいことを成し遂げたり、やり遂げたりっていうのは行動しとるっていうことやと思います。じゃあ結果的に、この徳島国際文化村で、ブレインストーミングなんかをやりながら、環境と芸術、二つの柱を立てようってことになりました。環境については、アダプトプログラム。これは、アメリカ生まれの道路清掃のボランティア事業です。アメリカで非常に効果を発揮しているけれども、日本のどこでもやられていない。じゃあ、これを神山で初めて導入することによって、神山を走る国道、県道にゴミが落ちてないってのを一つの文化村の文化の教義にしていこうってことで、それをやり始めた。芸術については、国際芸術家村を作ろうっていう話になりました。

これは、「アダプト・ア・ハイウェイ・プログラム」。1989年、アメリカ旅行中、カリフォルニアの高速道路で、こういうような一枚の道路標識を見ました。前の年も同じ場所に旅行に行ってます。前の年は立ってなかった標識です。じゃあ何が始まったのかなということで。散乱ごみの清掃をやってますよ。これより2マイルの区間、3.2キロです。これは、アダプト・ア・ハイウェイと呼ばれるプログラムですよということで、一番驚いたのは、ここに書かれていた文言です。ここには企業名が書かれてあった。あれ？って思いました。日本の国だったら、高速道路の清掃は国土交通省、あるいは北海道、埼玉県、京都府の行政がやるのが当たり前です。ところが、アメリカではこの高速道路を2マイルの区間、区間ごとに企業なんかのスポンサーをあてはめて、その人たちが行政に代わって掃除をするような仕組みが始まっていた。こういう仕組みってのは、将来必ず日本でも必要になるだろうと、ある意味直感を信じ、いつかやってやろうと考えておったわけです。ちょうど、国際文化村っていう話が出てきました。じゃあ文化の町ってどういう町だろうかっていう議論をしました。例えば、神山町外から神山町内に車で入ってきた人が、町に入ったとたんに散乱ごみが道路脇に山積みになっているような状態を見て、これ、文化の町に入って来たって感じられるだろうかってことです。感じられんよね。じゃあ、どういう町が文化なの。入って来た人がまず感じるの、あれ？、この町は気持ちいいよな、きれいだよってのを感じてる。その人自身が癒されている。なぜなんだろうと。道路にほとんどゴミが落ちていないっていうのは、入って来た人が多分五感で感じるような町が文化の町だと思います。そういう町を作るために、アメリカで非常に面白い方法があるんだけど、日本のどこでもやられてない。じゃあこれを神山で初めて導入しようって提案したら、仲間内から賛同を得られた。仲間の賛同が得られたので今度は、徳島県庁に、アメリカの非常に面白い方策、これを徳島県と一緒に試験実施したいから県も一緒にやりませんかという提案に行きました。そうすると、答えがすぐに返ってきました。だめですよ。なぜだめなのか。道路法があります。道路の商活動での利用は禁止されるから、この看板の中に入る、企業名が入ることによって企業の広告になるから、日本の道路では道路法で出来ませんって話でした。いくら説明しても担当者は仕組み自体には全

く関心がないわけです。とにかく法律で決まってるから出来んのですという話です。あっ、これは見たことないからだろうなと思いました。で、やっぱり人間、見たことないもの怖いわけですね。とんでもないことが起こるんじゃないかなっていう、警戒するわけです。で、じゃあこれは、前例づくりをする必要があるなということで、今度は1998年の6月に自主活動でこれをやりました。自主活動と言う言葉は非常に柔らかいんですけども、要するに強行突破です。こういうような看板を作って、企業名も入れて、神山町内でもう住民が2カ月に1回掃除をし始めた。そうすると1年4カ月後、徳島県庁も、いやこうした仕組みは県としても取り組むべきや、みたいな感じに変わってきました。で、結果的に、徳島県OURロードアダプト事業ってのが生まれて、看板の費用なんか県のほうが設置しますよということになって、これが進んでいきます。徳島県で一個こういうような前例ができると、瞬く間に47都道府県で実施されるようになってきたのが、このアダプトプログラムです。じゃあこれ、道路法で商活動での利用は禁止されています。道路法って何十年も変わってないわけですね。じゃあこれ、理由があるわけですね、出来るってことになれば。その時は、商活動での利用は禁止って言いよったんやけども、活動自体が商業目的でないから、これには当たらない。だから法律変わらんかってでも出来ることってあるんやと思います。行政の人は、そのあたりのところを考えながら、不都合だっていうところは口に出して、それを自ら変えていく必要があるんじゃないかなってこういう気がします。

一方、町に大きな変化を起こしてきたのは、このアートのプログラム。「神山アーティスト・イン・レジデンス」。1999年に始まり今年で18年を終わります。これまでに19カ国から、70名近いアーティストが神山にやって来て、いろんな作品を残しています。作品がこんな形で、山の中に自然と蓄積をされている。自然とアートウォークみたいなものが出来上がってきた。普通こういうようなプログラムを行政がやると、作品と一緒にすぐにアートウォークまで全部設計して作ってしまうわけですね。神山の場合はどうということかというたら、先に作品が出来て、結果的にそれらをつなぐ道があるよってことで、アートウォークみたいなものが出来上がるってことです。そのソフトを先、立ち上げて、後、ハードをそれについて行かせるってこういうことが重要になっていくんじゃないかなと思います。一個だけ作品を解説したいと思います。隠された図書館。「Hidden Library」この山の中に出来ました。一番近い集落はここです。上角商店街。道の駅とか神山温泉のある商店街です。距離で600メートルぐらい離れています。軽4トラックがようやくすり抜けられる様な坂道を上がっていくと、この図書館に到着します。

図書館の前には、2013年4月18日、あるものが出来ました。4月18日って何の日かご存知ですか？良い歯の日です。良い歯の日にここに歯医者さんがオープンします。当然山の中ですよ。地域の人たち、神山の人たちも、こんな辺鄙な場所で、周りに家がないわけだから、歯医者さんオープンしたってうまくいくはずないと思ってました。大繁盛してます。2週間先の予約取るのも大変なような状況です。多分人間の思い込みやと思います。例えば、神山の人がちょっと風邪ひいたなと思ったら、神山町内のお医者さんに診てもらいに行く。これは風邪程度だから町内でも大丈夫やろうということだと思います。ところが、風邪でちょっと重いなと思ったら、殆どの人たちは、車に乗って、バスに乗っ

て、徳島市内の総合病院、あるいは専門医に診てもらいに行く。これは、徳島市内には良い専門医がいるという思い込み。現実にそうなのかもしれません。そうだとしたら、神山の中に良い歯医者さんがいて、徳島市内から車に乗って、バスに乗ってやって来るし、大繁盛している。で、このCOCO歯科さんというのは、神山では結構オリジナルな移住者です。今から十数年前に兵庫県姫路市で二人とも勤務医をしようとした歯医者さん夫婦が神山にやって来ます。神山では、癒しの歯医者さん、カフェみたいな歯医者さんをつくりたいなっていうんでやってきました。で、構想を練って13年でほんとにカフェみたいな歯医者さんが出来上がりました。これ、歯医者さんの受付です。全く歯医者さんらしくないですね。中に入っても消毒の臭いがしません。アルコールの臭いは全くしません。臭いのしないような消毒液を使って、結果的に本当にカフェみたいな歯医者さんが出来上がった。ところが、忙しくなりすぎて、去年の3月までは月曜日と木曜日、週2回休んだけども、治療の時に腕が上がりようになってきて、去年の4月からは、もう日、月、木、週3回休んだような歯医者さんです。話を先ほどの図書館に。

なぜここに図書館ができたかって。神山町には図書館がなかった。だから、アーティストの作品で図書館を作る。借りるのではなく、預ける図書館。神山町民であれば、人生で影響を受けた本を一人3冊まで、一生の間にここの図書館に預けられます、収められますっていう図書館です。これが図書館です。掘立小屋っぽいですけれども、違う角度から見るとこんな感じです。作品を作ったのは、ベルリン在住の出月秀明さん。今、中に入ると少しずつ本が並び始めている。神山町民、あるいは神山町内で働いている人であれば、卒業・結婚・退職した時なんか読んでいた本、あるいは自分の人生に影響を与えた本を一生の間に3冊、ここに寄付できますっていう図書館です。1冊でも本をここに収めると、1個の鍵がもらえます。普通図書館はパブリックだから誰でも入っていけるのが図書館なんだけれども、この図書館は本を収めた人だけがこの鍵をもらえる。鍵を持った人だけが利用可能な図書館ということになります。そうすれば、この空間が40年後、50年後どういう空間に変わるかっていうことですよ。だから、多分神山の人の思いのいっぱい詰まった図書館が出来上がるはずですよ。仮に、この図書館が本で埋められるのに50年かかると仮定します。私は今63歳です。だからあと20年たったら83歳。ほぼ平均寿命を超えてしまいます。50年後、本で満たされた図書館を見ることはできません。でも、自分たちがずっと本を収め続けられない限り、50年後に本で満たされた図書館も出来上がらんと。地域づくりってのはこういうことやと思います。ほとんどの人たちは、やっぱり自分の目で、自分で起こした行動に対する結果は見たいわけですね。いろんなものを拙速に進めたり、あらっというものを作っていくんやと思います。だから、その自分で見たいという思いを、いや、自分じゃなくて、自分の次の世代、そんな世代の人間が見ればいいよってことで、時間軸を永くとることによって、非常に奥行きのある広がりのあるものが出来上がっていくんじゃないかなあと思います。本当に地域づくりと同じ考え方の図書館です。

じゃあ、「アートによるまちづくり」。今、日本全国で大流行しています。神山は1999年、このアーティスト・イン・レジデンスを始めた時には、全国26の自治体がこれに取り組んでいました。今は百以上になってます。この時に、二つの手法があったと。ほとんどの自治体の場合は、一番目のほう、見学に訪れる観光客を呼び込む。この人たちが

落っことしていってくれるお金で地域を活性化させていく。非常にわかりやすい方法です。当然観光客を呼び込もうと思えば、有名なアーティストにやって来てもらう。その人の名前とか作品でお客さんと呼んでこようとする。ところが神山のプログラムは、二つ大きく弱点を抱えています。一つは、資金が潤沢ではないということ。ということは、有名な人には来てもらえない。それとともに、地域住民が始めたプログラムなんで、アート教育をきちっと受けた専門家がない。言葉言いかえれば、美術館がやるように自分たちの力でアート自体を磨いたり高めたりする力がないってことです。そこで、発想を転換します。この観光客をターゲットにするんじゃなくて、制作に訪れるアーティスト自体をターゲットにしていく。一つのイメージとして、欧米のアーティストたちが日本で生活するんだったら神山だよねって呼んでもらえるような場所をつくっていく。だから、どういうことをやったかと言うたら、アートがわからんわけだから、ここでアートに向き合わずにアーティストという人間に向き合ったということが結果的に今の神山の動きを作ったと思います。だから、アートやなしに人に向かっていったということですよ。で、当然、このアーティストたちの滞在の満足度を上げる必要があると。神山には、四国八十八ヶ所十二番札所の焼山寺っていうお寺があります。十一番から十二番、十二番から十三番に至る遍路道を通っていくわけです。そこを行き交うお遍路さんたちに対して「お接待の文化」っていうのが今なお色濃く残っています。だから、そういうようなお接待の文化でアーティストたちを柔らかく包むことによって、つまりは神山の持っている「場の価値」を磨くってことに集極をしていくわけです。で、このプログラムを6年、7年ぐらい続けてた中で、そろそろ、愛好会、同好会的なアートのプログラムから、ビジネスが生まれるかなっていう方向を模索し始める。もうこの頃になると、自費滞在中の欧米のアーティストたちが年間ぼつりぼつりと神山に生まれ始めてます。じゃあ、そういう人たちに対して、宿泊とかアトリエのサービスを有償提供することによって、ここからビジネスが生まれんかなど。ビジネス展開しようと思えば、当然情報発信が重要になってきます。そこで、英語版を兼ね備えたウェブサイトの構築に掛かります。2007年、8年、総務省のモデル事業をいただき、「イン神山」っていうサイトを作りました。作った時に手伝ってもらったデザイナーが、西村佳哲さん・たりほさん夫妻とイギリス人のトム・ヴィンセント。この西村さん、たりほさん夫妻は、今から2年半ちょっとぐらい前にもう神山に移住してきたと。実は、神山町の総合戦略策定した時に、この西村さんがファシリテーターとなって、めちゃくちゃ面白いプランを練り上げていきました。いずれにしても、このアートでビジネスを興していこうって考え方からアート関連の記事が一番よく読まれるだろう、こちらとしても読んでほしいって思いで一生懸命アートの記事を作りこんでいきました。ところが、2008年の6月8日、このサイトが公開をされました。意外なことが起こりました。一番よく読まれるのがアートの記事じゃなかったということです。何が読まれたのか。ここです。「神山で暮らす」です。神山で暮らすってのは、神山の空き家情報です。この家は2万円で借りられますよって。この家は傷みが激しいから、装具入れても大家さん許してくれますよってな情報が、他の情報の5倍から10倍よく読まれることがわかりました。これまで神山はほぼ、Iターン者のいなかった町です。ところがインターネットに「神山で暮らす」という物件情報の小窓が開いたことによって、ここから神山に対するIターン需要の顕在化ってのが起こってきます。で、この「神山で暮らす」のコーナーを作った時に、

西村佳哲さんが一つの仕組みをここに入れてありました。これが、「ワークインレジデンス」です。地域に雇用がない、仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらおうという考え方。どんな仕事でも地域に変化を起こすとは限らるので、もう少し絞り込みをします。町の将来に必要と考えられるような働き手とか起業家を、空き家を一つの武器にしてピンポイントで逆指名しようっていう考え方。例えば、この家はパン屋さんをオープンする人だけに貸し出しますよってことで、受け入れ側がこの職種を決めてしまうってことです。同様にここは、ウェブデザイナーさんだけいらっしゃいということで、受け入れ側は職種を特定してしまふ。普通、移住は結果です。こういう人たちが移住してきた後で、今度来た人はパン屋さんをオープンするかもしれん、今度来た人はデザイナーさんだっっていうことで、受け入れ側の住民は、移住後にこの人たちの職種を知るのがほとんどです。ところが、事前にこの職種を特定、限定出来ることによって今度は、町のデザインが可能になっていきます。そこで、神山町内の上角商店街。道の駅とか神山温泉のある商店街の商店街図を取り出してきました。これ、1955年の商店街です。当時38の店がここで商売をやられていた。ところがそれ以後、徳島市内周辺に量販店スーパーが増えたり、あるいは神山への道路アクセスが良くなると買い物客は流出をしていくと。過疎化で買い物客の数自体もだんだんと減っていくわけです。当然、この商店街が衰退をしていきます。もともと1955年に38だったお店が、ワークインレジデンスを始めた2008年には、道の駅とか神山温泉リニューアルされたにもかかわらず、38のお店がわずか6店舗まで減っていたと。じゃあここに、それ以後ワークインレジデンスで呼び込んできた人たちを埋めていこうという会合を開きました。埋め始めると、ワークインレジデンスをこの商店街の空き家、空き店舗にすう一つと継続的に適用していけば、住民の人たちがこんな商店街作りたっていうのをほとんどコストもかけずに、入って来る人と空き家、空き店舗のマッチングだけで理想の商店街が出来上がるかなって思い込み、そこでグリーンバレーは一歩足を踏み出して「オフィスイン神山」って事業をここでやり始めました。これは、空き家改修の事業です。2軒つながりの長屋の一角をグリーンバレーが借り受けて、地域活性化センターから200万円助成金をいただいて、グリーンバレーも200万円を投資。400万で外装、内装、水周りを改修した。じゃあ、これは何のための改修かという。ここは、クリエイターがお試しスタイル、ライブができる場を作ろうとしました。じゃあなんでクリエイターかということですね。もうこの頃になると神山にはアーティストの移住者ってのが年間ぽつりぽつり生まれ始めてます。ところが、一つの問題に直面しました。アートで飯は食えんという状況です。せっかくアーティストの人が移住して来てくれたのに、それが生活の関係で定住に結びつきにくい。そうだとすれば、アーティストよりももう少しビジネス寄りの人。クリエイター、例えば映像作家、グラフィックデザイナー、カメラマン。そういうような人たちであれば、もしかして神山でも生活が成立するかもわからんと。でも、成立するかどうかってのは、トライアル出来る場、お試しの場がなかったら、そういう場所が具現化してこないわけですね。それらを炙り出すための一つの装置です。例えば、東京のクリエイターの人がここに1カ月、2カ月やって来た。自分の仕事をやりに来た。終わった後、帰っていく。また違うクリエイターがやって来て、1カ月、2カ月自分の仕事して帰っていく。こういうサイクルを繰り返す中で、あれっ、俺ここでも仕事ができるわ。言う人が現れたら、それが定住に結びつく可能性があるよ。

そういうようなものを見つけ出す一つの装置です。この改修については、東京芸大の建築学科の学生、院生、助手。それから首都圏の建築系の学生たちが2010年の夏休み、延べ250人ぐらいの手弁当ボランティアで、大工さんと一緒にこの改修工を手伝っていきよりました。で、こんな形で改修が進んでいったと。

改修が終わりました。これを借りてくれたのは、イギリス人のトム・ヴィンセントです。「ブルーベアオフィス神山」っていう名前が付けられました。実は今神山で起こっているサテライトオフィスってのは、この空き家改修のプロセスの中で偶然人と人がつながって、サテライトオフィスが生まれていくってことになります。だから、最初からサテライトオフィスをシリコンバレーかどっかで見つけてきて、神山にサテライトオフィスを作ってやるうってことでやったわけではありません。このプロセスの中で、ある面偶然生まれたもの。じゃあ何が起こったかってことです。2010年の3月、6月に、当時ニューヨークに在住していた二人の建築家が帰国することになりました。坂東幸輔さん、徳島市内の出身です。東京芸大を出た後ハーバード大学に学んだ。ニューヨークで建築家の仕事を始めようとしてました。もう一人、須磨さん。慶応SSCを出た後、コロンビア大学のデザインスクールに学んだ。ロックウェルっていうニューヨークの設計事務所に5年間くらい。坂東さんは、2010年の4月から東京芸大の助手のポストに就くため、須磨さんは赤ちゃんが生まれるってことで帰国をすることになった。一方でグリーンバレーでは、「オフィスイン神山」の事業が起動し始めておったと。これまでグリーンバレーは空き家改修の事業をやったことがなかった。だから建築家とつながってませんでした。ちょうど2008年、この坂東さんが、オープンした「イン神山」をニューヨークから見てくれとって、結果その年の10月、たまたま神山に遊びに来てくれた。その時から、知り合いになったわけですね。ちょうど坂東さんが2010年の4月から東京芸大の助手のポストに就くって話で、「坂東さん、それやったら、学生とか院生たちたくさんおるだろうから、その子たちを夏休み実習で神山に連れて来て、この空き家改修をやらんか。」という提案をしたら、ぜひやらせてくださいっていうことになって、で、設計図ができて模型なんかが出来上がりました。そうするとそこに、トム・ヴィンセントから1通のメールが来ました。神山にオフィスを置きたいって話です。じゃあ、これで出来上がったならトムさんのオフィスにしようってことで、先ほどの空き家改修で出来上がったお店がトムさんの「ブルーベアオフィス神山」に。このオフィスがほぼ完成に近づいた2010年の9月下旬です。須磨さんの慶応時代の同期で神山に初めてサテライトオフィスを置いた名刺関連の会社だったSansanの寺田社長が須磨さんから神山の話聞くことになる。寺田さんは、大学卒業後三井物産に就職、2000年から2001年にかけてシリコンバレーでの勤務を経験します。この人はずっと物産に働くつもりなく、いつかは起業しようって考えてました。起業した暁には、社員をシリコンバレーのような自由な雰囲気の中でがっちり仕事させたって思いがありました。予定どおり2007年の5月に物産を退社し、6月にSansanを起業します。その時以来、ずーっと新しい働き方を東京で模索しておった。そこに須磨さんから神山の話が。で、四国の小さな町なんだけれども、あなたのプログラムに合つとる。町内は光ファイバー網が張り巡らされとって、ネットの速度はめちゃくちゃ速いって話が伝わって来た。で、この寺田さん、2010年の9月25日、26日、土日に一泊二日で神山を訪れました。もう即断即決です。二十日もたたない10月14日に

は、この空き家だった建物で3人のSansanの社員が仕事をし始めとったのが、神山におけるサテライトオフィスのスタートです。だから、サテライトオフィスって、アイデアを実現したんやなくて、神山に入って来る建築家、クリエイター、デザイナー、さらにはベンチャー企業の起業家なんかの思いとかアイデアとかを住民の団体であるグリーンバレーが一緒になって実現をしとるから、結果的にサテライトオフィスが生えてきた、自生してきたと。だから、非常に今座りのいいものが出来上がってます。

こういうような動きが、NHKのクローズアップ現代あるいはニュースウオッチ9で一枚の映像として流れました。もうこの映像だけで、神山町の運命を変えてしもうたように過言でない。映像の力はむちゃくちゃ強いです。一枚の映像が、町の運命を変えるような力を持っています。これ、神山温泉の横の小川のせせらぎに足を浸けたダクソフトの社員が、MacBookを操作しながら東京との間でテレビ会議をしているっていう図です。この付近は、2007年くらいから神山町役場の若手職員あるいはグリーンバレーなんかも一緒になって、Wi-Fiの電波を飛ばしてあったわけです。だから、これ、やらせじゃなくて、現実に仕事をしよる姿が六本木ヒルズあるいはミッドタウンサテライトのようなITベンチャーの人たちに衝撃を与える。日本の国にもこんな場所があったんかと。それ以来、ITベンチャーの神山への流れは未だとどまることなしに続いています。

じゃあどういふ場所で仕事をしよるかってことですよ。これ、Sansanのサテライトオフィス「神山ラボ」です。こういうような場所って、結構皆さん方出身の地域の中山間に行ったら空き家になってる場所、古民家たくさんあると思います。そういう場所が、オフィスになる可能性が出てきておるといったところですよ。じゃあ詳しく見ていきます。これは、この会社去年の3月に、牛小屋をオフィスに変えてしまいます。で、開口部ありますよね、開口部は飼葉桶を入れよった場所だった。この内側にガラスの部屋を作ってる。これ、耐震出来てます、空調出来とるし、床暖房も整ってる。でも、これ、土壁見たら向こうが半分朽ちて落ちとるわけです。こういうような場所では、テレビ会議が多用されます。だからこれ、Sansanの表参道の本社が映っているというところですよ。さらには、屋内の仕事に疲れたら屋外で仕事をしたらいい。あるいは、単身者だけじゃなくて、こんな形で子供さんと奥さんを連れたような社員の滞在も実現しています。さらには、新入社員研修も神山で。最初Sansanは、プログラマー、エンジニアのためっていう建てつけでやったんだけど、最近では年に数度、営業も神山からやられてます。営業が神山のような山の中で出来るということになれば、これを日本の働き方をがらりと変えていく可能性があるんじゃないかなと思います。

もともとサテライトオフィスが神山に立地した2010年の10月ころ。これ、マスコミも含めて、本社人間が2週間とか1カ月ぐるぐる回ってくるだけだから、町に対するメリットはほとんどないっていうふうに考えてました。だから、この人たちが飲食したり、神山温泉に入る時の入湯料一人600円くらいしか落ちんと見とったんですね。やり始めるといろんなことが起きる。本社人間が移住してきて、常駐者でここで働いている。さらには、開発拠点化っていうのを進める。ここで、新たな雇用が生まれるわけです。

で、もう一個。これ、プラットイーズって書いてある。後で皆さん方もご覧になられると思う。ここは、2012年の11月に、築90年の古民家、蔵と土地を購入します。で、20年間も空き家になっとなった建物です。もう、地域人間、僕らからしても、もう白ア

り入って絶対使いもんにならないと思うてた。ところが、これが見事に半年をかけて、2013年の7月にサテライトオフィスに改修をされてる。神山のサテライトオフィスのアイコンになっているような「えんがわオフィス」ってのが生まれました。違う角度から見るとこんな感じ「えんがわオフィス」。新築のアーカイブ棟、奥に見えるのが、蔵オフィス。外観は古民家なんだけれども内側は結構最先端。ここでは、20数名の新規雇用が生まれてます。じゃあ、この企業、神山に入ってくるために、神山町役場が幾ら誘致のための予算を使ったかっていう話です。全くゼロです。全くお金使ってません。すべて企業のリスクの中で入って来てくれているってのが、今神山の状況です。

一方、このオフィスの斜め前には、築150年の酒屋さんがフレンチビストロに変わりました。で、これを動かしていったのは、アップルコンピュータに勤めていた齊藤郁子さんという女性です。この人は、何千万円の資金調達をどうしたと。これに対して、徳島県のお金、神山町のお金、全く入っていません。全て自分のリスクでこれを、「カフェ オニヴァ」っていうフレンチビストロに変えてしまったと。で、こんなおしゃれな建物になりました。ここでは、お客さん、国内は東京、海外はオランダ、アムステルダムからのお客さんが多い。これどういうことが起きとんのかってことですね。例えば、神山はこれまで、アムステルダム出身のアーティストを20組ぐらい受け入れてきてます。そういう人たちが今度本国に帰った時に、神山の情報を伝えると。だから、アムステルダムのアーティストのコミュニティに伝えた情報が、それがベルリンのアーティストのコミュニティに伝わり、それがロンドンに伝わってくる。全国のコミュニティはつながっているってことですね。そういうことで神山の情報は流れています。

もう一個は、SNSの関係です。フェイスブックです。フェイスブックというのは、自分の信頼できる友達の発信なわけです。だから、あの子が勧めてくれたレストランでこれまで外れたことがなかったみたいな信頼の中で、情報が伝わっていくってことです。だから、そこはもう今までの情報は海外も含めて、これ、山奥でも何でももう関係なしになって来とるってことですね。これが、ICTの力やと思います。

で、ここでは、毎月最終火曜日の夜に、「みんなでごはん」というイベントが行われている。これが非常に素晴らしいです。これには、常連さんも一見さんさんも地元の人でも遠くから来た人もシェフもスタッフもその日たまたま集まったお客さんはすべて同じテーブルを囲むってイベントです。その時は、兵庫県篠山から6名、東京から8名、S a n s a nの本社からも3名、さらに地域のサテライトで働いている人、地元の住民の人、この人がシェフの長谷川さん。全ては同じテーブルを囲んでいると。この場がどのような場になつとるかってことですね。そのまま異業種交流。で、ここで行き交うのはどういう情報やというと、これが人の情報が行き交います。これからは、こういうような町の中には人の情報の行き交う場が必ず必要になってきます。

例えば、皆さん方の町に道の駅があるかもしれません。道の駅は地図情報です。だから、近くにどのような名所、旧跡があったり、あるいはお寺、神社、滝なんかがありますよって地図情報を教えてくれるのが道の駅。道の駅に欠けている機能は人の情報が極めて取りにくいってところやと思うんですね。例えば、こういう場所に、町外、県外からある人が入って来るとします。スポットで入って来ます。全然見ず知らずの人。そういう人が例えば、神山の郷土史に関心があるっていう人が入って来たとしたら、必ず周囲の人

が質問します。何で神山に来たんですかと。いや、私は神山の郷土史に関心があるから来ましたって。言葉を発した途端に、このうちの誰かが、いや、それだったら、一番詳しいおっちゃん知っとるから呼んであげるわと。これが人の情報です。そういう場所が必ず町には必要になってきます。情報の中で一番面白いのは人の情報です。ここへ行けば必ずこの町の一番濃い人につながるというパイプを作り上げておく必要があります。

で、これはカフェ オニヴァさんの上半期の休日カレンダーです。上半期4月から9月まで、183日あったわけです。みどり、これ何日休みかと言うたら、90日が休みです。ほぼ半分休みです。で、今年の4月までは、週休2日です。普通、これ、地方のレストランで、週休2日でビジネスがうまく回れば、今度はどういうことをするんかっていうたら、お休みを削っていきます。5日営業するよりも6日、休みを取らんほうがたくさんお金が儲かるからそちらの方向に流れていくわけです。ところが、カフェ オニヴァの人たちはちょっと違う考え方を持っています。週休2日で回るから、収入はもしかしたら減るかもわからんけども、休み増やすんとどっちがいい、4人が協議した。全員賛成で休みを増やそうってことで、5月からは週休3日です。6月まるまる1カ月間は、スペイン、ポルトガルに研修旅行に行って、バカンスと研修で休みです。何をやりよったってことですよね。普通はこれまでの日本の働き方は、全てとにかくお金を儲けようって方向に進んでいくわけです。経済が右肩上がりだから、それが実現していくわけです。ところが、人口減少の時代が来ます。今度は人は何を求めるかってことですね。多分、収入、量ではなくて、暮らしの質とか生活の質っていうのを求めるんやと思います。そういう方向に敏感な子たちがもう動き始めてるっていうことやと思っています。だから、こういう流れはこれから、結構日本の主流になってくる可能性があります。例えば、この週休2日を3日にして、この1日は何のために使うかって言ったら、オニヴァの人たちはそれぞれ、スタッフもオーナーもシェフも個人プロジェクトってのを持っています。スタッフのある子は、神山に映画館を作りたいっていうような。オーナーの齊藤さんは、馬を飼いたいという夢を持っている。仮に、多分齊藤さんは、個人プロジェクトを磨く1日にしようってことですね、このプラスアルファの1日。多分ここで齊藤さんは馬を飼い始めると思います。そういう子です。思ったら必ず実行する子です。もし、ここで馬を飼い始めたら、ここから新たなサービスが生まれて、そこに雇用が生まれるってな形になっていくんじゃないかなと。そういうふうな思考方法をとっていく必要があるんじゃないかな、そういう流れがやって来ると思います。で、ピザ屋さんもオープンします。これは大阪からやって来た移住者です。

これは「神山塾」。これは6カ月間の職業訓練。2010年の12月にスタートして、6期で77名が修了しています。そのうちで、約半数が移住者として神山に残ってます。だから、神山に起こしておる変化の2割、3割は、こういう若い人たちが起こしておる変化です。さらに、その子たちのうちで約10名ぐらいは、サテライトオフィスあるいはその関連事業で雇用されている。グリーンバレーやっている人が一生懸命、職業訓練やったりつもりやのに、どういうわけかカップルができてみたり、赤ちゃんが6人生まれています。だから、婚活にもなってるっちゃうて今厚労省で注目の事業になっています。で、この神山塾を出た人たちが小さな起業を始めてる。愛知県出身の金澤さんは、ドイツで1年間の靴の修行したことがあって、今度は神山でオーダーメイドの靴屋さんをオープンした。「オーダーメイドの靴屋を神山で」。絶対無理やと思ってましたが、うまく回ってます。

靴のオーダーメイドなので最低の納期がかかる。木型から作ります。今は6カ月以上の待ちです。私も2足目を昨年10月に発注したら、納品されたのは6月の半ばです。それぐらいの見方で回るとるっちゅうことです。だから、決めつけたらあかんってことです。

「こんなんは絶対にダメや」って決めたら、そこから可能性は全部なくなってしまうってことやと思います。五味さんは、元フレンチのシェフです。神山塾で学びながら、神山に必要なものは何かなあって見とったら、結構高齢者の人も含めてお弁当をコンビニで買っている、味の濃いやつ。そうじゃなくて、地域の人たちがこれまで食べてきたようなお惣菜をこのお弁当の中に詰めて、日替わりのお弁当を作った。結構売れてます。ここで、毎日高齢者の人が買いに来る、押し車を押して買いに来るわけですよ。その時のあいさつが、「今日は何があるんて？」っていうようなあいさつですね。だから、こういうふうに、こういう人たちが起業することによって、地域の福祉まで関係してくるってことやと思うんです。で、これは、寄居商店街、えんがわオフィスのある商店街、ビストロなんかがある。ここは、ワークインレジデンスを活用したもの。オフィスとかレストラン、商店なんかを誘致してる。もともと灰色で塗りつぶしてあったのは、4年前までは空き家、空き店舗だった場所です。ここがだんだんと今埋まってきてます。一番最近だと、今から4日ぐらい前にこの「モノサス」っていう会社が、ここにサテライトオフィスの改修が終わりました。えんがわオフィスをご覧になれる時にちょっと見られるんじゃないかなあと思います。だから、こういうようなことになれば、人の流れの途絶えとった商店街に新たな人の循環、あるいはここで経済が回り始めるってことです。その循環を取り戻すってことが重要だと思います。こういうような循環を、ここの別の空き家を持っている人に見てもらって、で、移住者とかこういうような店が増えることによって町がどうやって変わっていくんですよってのをこの人たちにってもらって判断をしてもらおう。だから、こちらのほうから、お宅がこの家を貸してくれんから町の活性化ができませんのですよ、みたいな考え方はしないってことです。その人たちが、気づきの中で、いや私も協力しようっていう人を柔らかく増やしていくことが重要になっていくんじゃないかなあと思います。

で、宿もできました。これも皆さんご覧になれると思います。「WEEK神山」っていう宿です。古民家を改修した食堂棟と、スギ、ヒノキで新築した宿泊棟。坂東消費者庁長官なんかも、こういう場所で5日間滞在したっていうところです。当然ここでは、有機野菜を基調とした地産地消のメニューが出されています。

ここで、昨年12月に放送されたクローズアップ現代をご覧いただきたいと思います。
(視聴)

今までなかったような機能が少しずつここに集まって来ている。回り始めるってことです。地域内で経済が循環し始める、小さいながらも。

これが、コワーキングの場です。もともと縫製工場だった場所。これに、徳島県と神山町とグリーンバレーが300万円ずつお金を出して、内部をこんなコワーキングのスペースに変えた。これも後で皆さん方が見学されると思います。ここでは、7つの企業、法人がサテライトオフィスを置いておると。徳島大学が置いとるのもここやし、徳島県庁も職員2名が常駐しとるのがこの場になります。この一角に今年の3月、デジタル工房ってのを作りました。「神山メーカースペース」。ここに、3Dプリンターとレーザーカッターなどを置いたわけです。じゃあ何でこんなこういうようなものを置くかっていうことで

すよね。これらを自在に使いこなせるような人が先に神山には集まって来とるってことです。この人は寺田さんです。3Dのカーモデラー。トヨタ自動車は昨年10月、東京モーターショーに、レクサスっていう高級ブランドの新世代モデル、次世代モデルっていうのを発表しました。これを3Dで描いたのはこの寺田さんです。超一流のカーモデラーです。一方で、このfrisbee。海外の大会なんかたくさん出ている、この人は、30枚くらい持っている自分のfrisbeeを持って、昨年の12月8日です。神領小学校を訪れました。子供たちは一時限の間ずっとfrisbeeを飛ばせる練習、あるいはなぜfrisbeeが飛ぶんかっていうような授業を寺田さんから受けとる。それから9日後、先ほどのコワーキングスペースにやって来て、子供たちは寺田さんの指導でfrisbeeを自分で3Dでデザインしてます。これでデータをとって、今度は1月にこれを3Dプリンターで出力をして、1月下旬の授業は子供たちが自分でデザインして出力をしたfrisbeeを飛ばせるっていうような授業をやっています。何でこういうことが出来るんか言うと、それらを使いこなせる人が先に集まって来とるっていうのが神山の特徴です。一方、この人阿部さやかさんです。今年の2月まではオランダにアムステルダムに住んでました。この人は2013年の神山アーティストインレジデンスの招待作家です。その時はアムステルダムから参加しました。たまたま去年の3月から5月まで神山町内に滞在しとったわけです。その時に、阿部さん実はな、来年になったら神山にレーザーカッター入るんよって話をしたら、ああそれだったら、もう私はアムステルダムに住んどる必要ないからっていうんで、今年の2月に自分のパートナーのアイランド人と一緒に神山に移住してきたと。移住してきた途端に、この城西高校神山分校ってところに入って、生徒たちにレーザーカッターを使ったものづくりを教えています。例えば今年の5月には、地元産で作ったキーホルダーを開発し、結構これ売れ行きがいいらしいです。何でこういうこと出来るんかちゅうたら、機械を自在に使える人が先に集まるとるちゅうんがポイントです。レーザーカッター使ったり3Dプリンター使えばいろんなことができますよっていうことになれば、結構自治体は先に機械を買ってしまうわけです。経産省の補助金があるから機械を先に買うと。ところが使える人間をおらんから埃をかぶるってことになっちゃってる。まずは人を集めるってことが一番重要であるということです。

じゃあ、神山で起こったことをちょっとまとめてみます。

1999年、文化芸術から始まりました。そうすると2、3年後から起こったのは、アーティストの移住者が年間ぽつりぽつりと生まれはじめました。で、今度は2008年からは、ワークインレジデンスで力を持った起業者を集めてきた。今度はそうすると、移住者だけじゃなくて、IT、デザイン、映像の会社まで神山にサテライトオフィスを置き始めます。じゃあ、この固まり、人の流れっていうものを、これまで神山になかったものっていうんで、新たに出来上がったものです。こういうように、新たなものが出来上がることによって、これまで神山に成立し得なかったものを成立させ始めた。だから、こういう人の流れが、サービス産業を起こしたっていうわけです。ビストロだったりピザ屋さんだったりビジネス客用の宿泊施設が回り始めました。じゃあ、このサービス産業で使われるものは何かと。当然、農産物が使われます。中山間の本丸である農業に影響を与えてるってことになります。普通、自治体なんかはこの本丸から攻めようとして、結構うまくいってないところが多いような気がします。わが町の農業をどうにかしようと。6次産業化つ

てやるんだけど、結構うまく回りよらん。グリーンバレー自体、僕ら自体も、神山の農業をずっと心配してました。でも、自分たちは農業の知識もテクニックもないから、自分たちの手は農業には絶対及ばんと思ってたわけですね。違う技術しかない。でもここに、もしかしたらヒントがあったかもしれない。この、文化芸術家が入ったことによって、新たな人の流れを生んで、それがサービス産業を起こして、農業を育み始めたっていう行程。ここまでわかってきたら、ここの農業の部分ってのは、ワークインレジデンスで有機農業者ってのをここに集めてきた。そんで5年間ぐらいに神山に5つぐらいオーガニックフード系のレストランがオープンしたと。もう地域内で農業とサービス産業がぐるぐる回り始めるような、結構日本では珍しい町が出来上がっています。これまで、ここで生産された農産物がどのような経緯をたどったかということです。それは、当然、農産物として出荷されている。地方卸売市場を経て食材として東京都内のレストランに届けられるってことです。地域に落ちるのは農産物の代金として。仮に1,000円、2,000円が落ちてくると仮定します。ブランド化しようと。これが2,000円、3,000円になるかもわからん。でも、この材料を使った東京都内のレストランでは、それが1万円の料理に化けるってことです。サービスが全てあちらで起こったら、雇用も全てあちらで起こってくる。地域に落ちたのは農産物の代金だけという構造。こういうような形で、ブランド化を進めていってっていうのも、これも必ず必要な方法です。でも、これから持つべき視点は、プラスアルファで地域内にサービスを生んでいくっていう必要があります。地域にサービスが生まれると、これが農業を元気にする。農業が元気になると景観を造ります。景観は誰を呼びよせるかという、これが当然観光客を呼びます。で、この人たちがこのサービスを受けるってんで、実は、多分地方創生の本質は、地域内経済循環やと思っています。出来るだけこの経済を健やかに回すってことです。単純に。自給自足、地産地消だけで地域内の経済を回すと経済は小さくなっていくと思うんです。なぜかいうと、ここに足りないサービスを買いに外出する時にお金が流出するってことです。例えば、神山には本屋さんがないわけです。Amazonで本を買うとする。その代金っていうのは、もしかしたら日本の国内に残るかどうかも危ういです。ところが、これは仕方がないことです。地域内にサービスがないから、買いに行くのは仕方がない。それらを補うために、例えば、東京の皆さん、神山のオーガニック野菜食べたいんだったら神山に来てくださいってことで、この地域循環の中に観光というものを呼び込んで、これを健全に回していく必要があるんじゃないかなっていうような気がします。これがこれまでの神山における地域活性化の姿です。で、例えば、グリーンバレー流に言えば、国際交流でベースを作って、そこにアートを持ち込んで、そこに新しいライフスタイル、ワークスタイルが生まれる。今度は、知識、経験それから技術を持つ人たちがここに現れる。その人たちが、今神山の変化を主導していきよるっていうところやと思います。

じゃあ、神山町の地方創生総合戦略ってのは、神山町4.0です。で、「まちを将来世代につなぐプロジェクト」というプロジェクトをやり始めました。これが、会議の模様です。昨年の7月下旬から約3カ月間に、15回から20回、ワーキンググループの会議ってのを、あるいは勉強会をやりました。1回の会議は3時間です。3時間の会議を15回から20回延々3カ月やり続けて、これをまとめていきました。まず考えたのは、人が移り住んで来る、帰って来る、留まることを選択する背景には地域に可能性が感じられる状

況がなければ、そういうことは起こらなろうと。だから、可能性のないって感じられるような町には、人は来ないだろうって考え方。じゃあ、可能性の感じられる状況とは何かということを知解いていきます。で、いろんな条件をこういうふうに出してきて、これに対して、施策の領域ってのを、7つの施策領域ってのを決めていった。「すまいづくり」「ひとづくり」「しごとづくり」「循環の仕組みづくり」「安心な暮らしづくり」「関係づくり」「見える化」です。

じゃあ、これ、去年の暮れから今年の最初ぐらいによく見た地方紙の地方面に載った、ある町の地方創生の総合戦略をまとめた時の概略の記事です。で、この町は、有識者会議、これをやったわけです。2回目の有識者会議を12月にやります、ここで素案が提示されましたって書いてあります。3回目を2月にやって、ここで最終案が決定されると。多分、1回の会議は3時間ぐらいやと思います。だからこの町は、3時間の会議を3回やって、アクロバットの、もうサーカスみたいなスピードで総合戦略をまとめたってことがこれでわかります。細かく見ていけば、会議では委員から、住民の協力も得ながら観光客誘致に力を入れる、若者に焦点を当てた後進育成にとりくんでほしいといった意見が出たって書いてあります。でも、そもそも、この有識者の人たちの役割は、この解決方法を見つけ出すのがこの人の役割のはずです。ところが、ここで行われているのは、私たちは言いました。提言だけです。ここでのスタンスは、やるのは行政でしょっていう、今までどおりのスタイルです。これを受け取った行政はどういうことをやるか。ある面アライバイづくりです。住民の意見は聞きましたよねと。各種団体者を集めとるから、これを住民の総意ですね、みたいな感じで。これはアライバイづくりです。それで、今度やられるのはこれまでどおりです。で、自分の市役所あるいは役場の職員がコンサルを呼んで、この回の時にこんな文言が出たから、最終案にはちょっと言葉変えようかって言うてまとまるのはこういう総合戦略なわけです。だから、10年前の計画と今の計画全く同じ課題が並んでる。全く課題が解決されていないということやと思います。同じようにこれを何百回繰り返しても町は良くなりません。

そこで、神山の場合は、この戦略のプロセスをがらりと変えるってことを選んだ。まずメンバーから変えんかったらあかんやろってことです。神山の場合は、コアチームとワーキンググループってのを作りました。コアチーム8人。町長と役場職員4名。このうちの一人の総務課の男の子が、今事務局役員です。そこに、西村佳哲さんがファシリテーター役、それから後藤太一さんという福岡にいる経済事務官の人、私が民間から入る。これがコアチームを結成する。一方、その下にワーキンググループを置く。28名。うち14名は神山町役場の若手職員。各課から2名ずつ。こちらのほうの住民のほうからも14名で、うち6名は移住者です。地域おこしのOBがいるし、サテライトオフィスで越して来た人、あるいは神山地区のOBの方。こういうような構成を立てました。コアチームってのは、普通の町の有識者会議に当たる部分です。普通はここに各種団体長の人に集まってもらうわけです。じゃあ、なんで各種団体長の人をここに集めんかったかってことです。例えば、3時間の会議を3回開くんやったら各種団体長の人でも参加できます。非常に忙しい人なんです。ところが、「すみません、各種団体長さん、うちの会は3時間の会議を3カ月間に20回やるから出てくださいね」って言われたって、忙しいから絶対出られません。代理出席がこんなところに出てきたって深まる議論が全くできません。だから、各種団体長の人

たちには外れてもらおうと。出られる人間でそれを構成しようってことです。まず、このコアチームの役割の部分、これは認証、お墨付きを与えるっていう一つの役割があります。何かって言うと、下から、ワーキンググループで上がって来たアイデアを出来るだけそのまま取り組んだ形で、ここでお墨付きを与えていこうってところです。普通は、ここでワーキンググループで、せっかく先進的なプログラムが出てきてもここで潰される場合って結構多いんです。これ、うちの町も早すぎるみたいな。これ時期が早いやろ、みたいな感じで、ここで潰す。これを避けようって。だから、認証を与えるってことで。ワーキンググループにはどういう人たちを集めたか。アイデアを他人任せではなく自分事として実行・支援できる人たちをある面ここに集めてきたわけです。この中で延々会議を繰り返していきます。そうすると面白いことが起きる。だんだん、だんだん、役場職員と住民の混成グループが、自分は人づくりやりたい、自分は仕事づくりやりたいってことで、グループに分かれてくるわけです。やりたいことが同じ人たちが集まっていく。で、これの中間発表会っていうのを今年の11月2日に行いました。町民向けの、今どうのようにワーキンググループの中で話がされとるかっていうのを発表会です。この時に、結構面白いことが起きます。いろんなグループの人たち7組ぐらいが、自分たちグループのプレゼンをやるわけです。プレゼンひととおり終わると、構成員だった子たちから次々と手が挙がり始めます。このプランってのは、役場職員の子が、これ私がやるんですって言うてたら、住民側は、俺がやるって言うんです。役場職員のほうから、これ異動してでもやりますって言うと、今度住民側から、自分は自腹切ってでもやると。最後には、役場職員、男の子3人です。自分は役場辞めてでもこれやり続けますって言う子が出てきて、それでがらっと雰囲気が変わるわけです。ってことはどういうことかできたんかいって、計画の立案の段階で、役場職員と住民による実行組織が、もうそこで誰がやるかってのが決まっちゃったってことです。だから、計画立案が終わると、もう全速力でこれが回り始めるってような状況になっている。じゃあ、このコアチームです。コアチームは、この計画を認証した責任があります。普通は、有識者会議ではこれ、策定終わると解散されます。で、もう影も形もなくなるわけです。でも、責任あるだろってことで、町長と役場職員3人をのぞいて、この総務課の子が出向してきた。この4人が理事になって、一般社団法人神山つなぐ公社ってのをつくりました。だから、神山における総合戦略の実現は、役場がやるんじゃないわけです。この役場とグリーンバレーが一緒につくった、この神山つなぐ公社ってのが実行していきます。どういうことかと言うと、7つの施策領域にそれぞれのプロジェクトが紐付けられています。これを、プロジェクトを実現に導くのが神山つなぐ公社。つなぐ公社だけ頑張ってもうまくいかんから、役場庁舎内に課長クラスの戦略会議、神山町つなぐ会議ってのをつくって、2週間に1回、月曜日の夕方3時間ぐらいかけてここで連絡調整を行っている。つなぐ公社のほうから、課長さんすみません、ここ問題点一個あったらこれ一緒に解決してくれませんか、みたいな情報共有をしながらいろんなことを進めておるといようなことになります。

今ちょうど、関西圏の人たちになんですけど、朝日新聞の大阪本社版の夕刊に神山が連続52回今取り上げられてます。今日で32回ぐらい終わってるような感じです。もし、この夕刊の配達される地域だったらまたご覧いただきたいし、徳島県内では翌日の地方版に載っています。配達されんと言う人は、朝日新聞デジタルで、これ無料登録すればこの

記事が読めるって。結構いい記事になってます。52回もやってくれるんで、非常に克明にグリーンバレーの中で何が起こってきたかっていうのが記されてますので、もし関心があるようだったら、朝日新聞デジタル「神山町の挑戦」ってことで検索していただけたら、お読みいただけるかなあとと思います。

これ、最後のスライドです。僕の私の好きな場所。皆さん方にも好きな場所、あるはずです。ありますよね。ところが、好きな場所を好きなまま置いておいてもなんも変わらなくてことです。じゃあどうすればいいのかってことです。

まずは、「すきな滋賀」を「すてきな滋賀」に変えましょう。難しいですか。これ、案外簡単なことなんです。すきに何を加えたらすてきな滋賀になるんか言うたら、これは「手」を加えることです。手を加えるってことは、皆さんから行動を起こすってことです。滋賀だけえこひいきするといかんで、「すてきな江差」をつくっていただきたい。あるいは「すてきな所沢」さらには「すてきな伊根」をつくっていただけたらなあというところで。

考えとるだけでは物事は動いていかんということですね。だから、今日来られとる人ってのは、結構町の中でも市の中でも中心になつとる人やと思います。だから、そういう人がまず模範となって、一步を示すことによって他の人たちも勇気を持って次の一步を進めていくってな形で、もっともっと素敵な場所をつくっていただけたらなあというところで、私のレクチャーは終わります。

どうもありがとうございました。

レクチャー終了後、質疑応答の時間があり、委員からは以下の質問を行った。

質疑. 株式会社フードハブ・プロジェクトで「小さな生産と小さな消費を繋ぐ」というのはどのようなことをやられていくのか教えていただければと思います。

応答. テーマは地産地消。地域で作ったものは地域で食べようっていう運動ですよ。これ、何かいうたら、例えば、普通は先ほど申し上げたように、地域の農産物はブランド化しようという形でブランド化を目指すわけですよ。ところが、神山の農業は条件不利地です。だから、量が集まらんわけです。もしブランド化が仮にできたとしたら、マーケットのほうは量を求めてきます。うまいこと売れるからたくさん作ってくださいと。でも作れんわけです。だから、ブランド化していくことが価値を生むんじゃないくて、ブランド化しても量が出来んから、もうそれは地域の中でつくったものを地域で食べるっていうような形で、そこを非常に見える化していったら。その循環に人を呼んで来ようっていう形です。だから、この縦の中で全て教育プログラムも全部巻き込んでいって、学校給食も含めるし、それから子供たちが作物と一緒にフードハブの人たちと作っていったりする過程も、全て教育のプログラムも全部その中に巻き込んでいって、そして地域内の経済循環もできるだけ見える化した形で進めていこうってのがこの考え方です。特に、例えば、新潟県の南魚沼産のお米を売られる時には、その農家さんの顔写真で結構あれしてますよね。ところが、その生産をした人たちは、消費者がどのような顔をして自分の作った農産物を食べてくれよるかって

いう姿が見えんわけですよ。買う人たちも、消費者も写真で見るだけで、その生身を見る事が出来んわけです。誰が作って誰が食べるっていう循環を、きちっと見える化することによって、結構新しいことがそこからまた生まれて来るのかなあみたいなことをやろうとしてます。これからは多分、単純に写真の人が作ったお米みたいな感じではなくて、もう少し濃い関係が求められているのかなあ。この人が作ったものを私が食べる、みたいなところで、そこが見えるような形をつくっておけば、結構そこに人が出入りして行って、また小さな経済を育んでいくのかなあみたいな出会いですね。

質疑. 地域の高齢者の人たちはどういうふうに町おこしを感じてるのか。

応答. 結局、これ、グリーンバレーの場合だと26年ぐらい前から本格的に動き出して、26年今かけて来とるわけですね。これまで、急に2、3年のことをマスコミは取り上げて大きく報道されて、こんなに変化したら地元の人は困つとるかと思うけども、これ結構26年間ぐらいかけてゆっくりと、地域の人が変わることができるくらいのスピードで、ずっと一緒に変わってきてくれちよるから、あんまりそういうような違和感はないのかなあっていうような気がします。それが急に増え始めると、何かもう、いやこんなはずやなかったということに必ずなっていくんだけど、結構時間はかけてきてますよね。それとともに最近、地域の人たちがそういう移住者の人たちの生き方を見ながら、変わり始めたってのは非常に大きいかなと思います。良く例に挙げるんだけど、例えば、カフェ オリヴァさんのカウンターで夜9時ぐらいになったら、地域の70何歳ぐらいの人たちが何人かこう来るらしいです。そういう人たちが、このスタッフの、働いている人たちを見て、人生損したっていう話をするらしいです。なんでか言うたら、自分自身は18歳で神山に帰って来た。神山に帰って来て、55年間とにかく自分の人生で一番重要なのはお金を儲けること、残すことが重要やとずうーっと頑張ってきたと。で、まあそこそこお金は残った。だけど、あんたらなんか見よったら、当然俺らよりはお金もつとるのは少ないと。そやけど、なんか人生楽しそうに過ごしとると。で、人生感謝と言うらしい。で、結構高いワインを飲んでくれるらしいんです。これは何かと言うたら、感謝から元を取り戻すためにお金を浪費しようって話ではないと思うんですね。自分がワインを飲むことによって自分のお金がこの子たちにわたって、この子たちの生活が回り始めるっていう、結構緩い、こう、循環が見えて来とんのかと思います。だから、俺バンバンお金使うぞ、みたいなテンションで、ここの店来たらいつもぼられっぱなしや、みたいな、笑いながらお金を使うっていう状況やと思うんですね。その高齢者の人と僕も話をしたら、けどな、今神山変化しよると。70何歳やからあと5年ぐらいしたら、もしかしたらこれいつプツとこう人生途切れても不思議でないから、この変化が見られんようになるかもわからんと。だから、神山の変化がどういうふうになっていきよるかってのがみられんようになるのがなんか残念でならんっていうような話をしてくれた。その後、そやけど、まだ5年間ぐらいいけるかもわからんから、自分にできることあるはずやから何でも言うてくれよっていうことで、こう、意識が変わってきてる。そこが一番、こう人間って大事な気づきっていうものを高齢者の方も含めて感じてくれとるんで、

結構これは可能性大きいなっていう気は自分自身はしています。

③ サテライトオフィスツアー

グリーンバレー職員の案内により、レクチャーにあった施設のうち、株式会社プラットフォームのサテライトオフィスである「えんがわオフィス」、徳島大学「神山学舎」や徳島県庁「未来創造オフィス」が入る「神山バレーサテライトオフィスコンプレックス」、宿泊施設「WEEK神山」を見学した。

5 所感

COOL JAPAN FOREST構想を推進するに当たっては、今後国や埼玉県との関わりも想定されるものであり、徳島県が徳島市内で開催するこの取り組みについては、構想の拠点施設を中心とした催し等の実施に関連して、地方創生に係る審査の視点として参考にしてまいりたいと思います。

また、NPO法人グリーンバレーを中心とした一連の取り組みは、全国が注目する有名な施策であり、地域において多大な成果があがっていることについて、レクチャー等を通じてその中身が良く理解できました。地方創生に係る多面的な視点として、今後の委員会審査の参考となるものと感じました。